
桃喰鬼 トウクウキ

納 平子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桃喰鬼 トウクウキ

【Zコード】

Z5635D

【作者名】

納 平子

【あらすじ】

昔々の御嘸…、桃の名を持つ青年が、鬼ヶ島と呼ばれる孤島へ鬼退治に向かった御嘸。そこで青年を待っていたのは、鬼の童が独りきり。風評とはあまりに異なる島の現実に、青年は鬼の真実を確かめようと共に暮らすことを決めました…。昔話『桃太郎』を新たな視点から描いた、新訳桃太郎です。

第壹篇 鬼達 キアイ

昔々、あるところに、

桃太郎という若者がありました。

桃太郎は正義感が強く、

とある島に棲む凶暴な鬼達が、人々に悪さを働いていることを人伝に聞き、

鬼に対して大層な怒りを覚えました。

桃太郎は自分を育ててくれたおじいさんとおばあさんに別れを告げ、

鬼を懲らしめるべく、鬼ヶ島と呼ばれる絶海の孤島へと旅立ちます。

幾多の困難を乗り越え、

鬼ヶ島に辿り着いた桃太郎は、

鬼と対峙し、

戦いを挑みました

。

「ここが鬼ヶ島か…」

殺風景なところだな、と青年は率直な感想を抱いた。

手製の木舟をひたすら漕いでやつて来た島は、噂通り草木も生えていない荒涼の地。島全体はゴツゴツした岩肌で覆われ、小高い山が幾つかあるばかり。世にいう地獄という場所を連想させる。

空はどんよりとした曇り模様で、島の景観もあつてか、彼のこれからの行く末を暗示しているような気さえする。適当な石場に舟を着けた青年は身を震わせて、胸に膨らんだ嫌な想像を振り払つて島に降りた。

鬼ヶ島。

人ならざる者、鬼が住まう絶海の孤島。

人を襲い、物を奪い、暴れ回り、そして殺す。多くの人間が恐れて逃げ惑い、近づくことなど決して有り得ない。

そんな鬼達が根城とする島に、青年はたつた一人でやつて來た。

幼い頃から英雄に憧れていた青年は、無償で人を助けるのが当たり前だつた。町にはびこる無法者達が問題を起させばすぐに駆けつけ、役人達より先に解決するのが日常だつた。

誰かの下で働くのは性分ではないからと役人にこそならなかつたが、青年が暮らす町や近隣の村では用心棒的存在としてありがたがられていた。

そんなある日、町で繁盛している茶屋で一服していた青年の元に、一人の行商人がやつて來てある噂話を聞かせた。

「最近、城下で『鬼討伐』の札が立てられたらしいですよ。なんでも鬼は角の生えた化け物で、町の連中を襲つて食ひ荒らしているとか。役所の腕の立つ武士が何人か名乗りを上げて鬼がいる島にいつ

たらしいですけどね、誰一人として帰つてこなかつたとか…。戦もないこのご時世に、未恐ろしい話ですよねえ？」

青年は、その話をあくまで噂として聞いていた。

生まれてまだ二十年余りしか生きていかない青年だが、今まで「靈や妖怪の類は見たことはなかつたし、

伝説や空想でしか語られない鬼が、実在するとは露ほども考へてはいなかつた。

「右も、左も！ 本当に若しかないの、かッ。…これはますますもつて、怪しくなってきたな！」

岩に張りついた苔に足を取られながら、苛立ち混じりに呟く。

青年は島に降りてから小一時間、島の外縁を一周、ぐるっと回つて歩いていた。島がどの程度の大きさなのかも知りたかったが、目的はそれとは別にある。青年はこの島に来る前に聞いた、ある話が本当かを確かめたかった。

「……“騒げば鬼に見つかるが、黙つていれば助かる”。どういう意味なのかさっぱりだったけど、こいつことだったんだな」

島の半周を過ぎた頃。

吸い込まれていく潮風に背を打たれ、青年は話が本当だということを知つた。

青年が立つ岩場の前には、人が優に百人は通れそうな幅の大穴が開

いている。自然が長い年月をかけて生み出した洞窟だ。

島の上を歩いてみても、鬼がいるどころか生き物の気配すらしなかつた。いふとするなら、この地下に繋がる空洞が当たりになるだろう。

ここが、鬼の巣窟。

「…………」

生睡を飲み込む。

腰の紐に差した刀を確かめ、意を決して中へと進んだ。

洞窟内は鍾乳洞になっていた。

地上に降り注ぎ、大地から滲み出た雨水に溶かされた岩が幾重にも伸びる。下にはたけのこの形をした石筍が軒を連ね、地上で散々足を滑らした青年は中腰で前に歩く。洞窟の中は入り口から離れると次第に光を失い、闇の色を濃くしていく。

「灯りになるようなものもないのか。鬼は夜目が良いのか……」

段々視界が奪われていくのに焦りを感じ始める。この状況下で襲われでもしたら、どんなに腕が立とも意味を為さないかも知れない。

辺りを注意深く見回す青年の頬に冷や汗が流れる。

「どうにこうる……？」

洞窟の暗さに眼が慣れてきた。
岩場の影を見ても、誰もいない。

天井には大量の蝙蝠が、ぐつすりと眠りについている。

近くで川が流れているのか、水が岩を打つ音が聞こえてくる。

青年は静かに息を吐き、少し休憩をしようと腰を、

「……珍妙な客。独りで鬼が棲まつ島へ来るなんて」

後ろから声が、

青年の肝が冷え、

刀の柄に手を、

「……辞めておく方が無難。先に心の臓器を取り出されると

背中に食い込む、刃。恐らくは、鬼の持つ鋭い、爪。

迂闊だった。背後に忍び寄っていたことに気づかなかつたなんて
……、

頭が混乱する。

心臓が早鐘を打つ。

どうすればこの危機的状況を切り抜けられるか、切羽詰まつた青年は、

青年が取つた行動は、

「！」

絕叫。

鍾乳洞内部を一様に震わせる、大轟音。

耳を劈くような、大声。

その突飛な一手に鬼は驚き、「こそすれ動じる」とはなかつたが、

「む…… 蟻噺？」

鬼の視界が一瞬で覆われる。否、身体の全てを包まれる。
音の反響で吃驚し、文字通り飛び起きたのは蝙蝠の群れ。

全身に群がつて身動きを封じられた鬼はたじろぎ、青年はその好機を逃さなかつた。

蝙蝠に邪魔されないよう低く構えた青年は、後ろにいる筈の鬼の身体に突進する。青年の特攻は運良く鬼の足を捕らえ、青年と鬼は濡れた石の上へと転がり落ちた。

「ツ……乱暴、無鉄砲……教養がない」

「何を言つてゐるのか…………判らないが、貰つた！」

鬼に馬乗りになる形で止まつた青年が勝ち誇り、右手で鞘から刀を引き抜いて逆手に、左手を柄に添えて切つ先を鬼の喉に突きつけた。そして躊躇うことなく刀を降り下ろし

「……何？ 刺すなら早く刺す。刺さないならそこを退いて」

「…………童？」

青年の手は止まつた。

自分が被さつている鬼の姿は、暗闇のせいで上手く判別し難かつたが、手を止めるには十分な動機になつた。

子供だった。

闇の中に赤く輝く髪を持った、見た目十歳程度の童。

まだあどけなさが残る顔に、唯一その瞳だけに、年不相応な眼光を光らせた、

どうみても残虐非道、どう映しても人肉を喰らう、城下の民を震えさせた化け物の姿には見えなかつた。

第三篇 鬼怪 キカイ

鬼と青年の出逢いは、互いに殺しあう最中のことだった。

「私の名は桃。貴方は太郎。それで決まり」

「決まり……って、人の名を勝手に貰い受けるな」

「名が無いと不便だと言つたのは貴方。何か名を立てると言つたのも貴方。文句を言われる筋合はない」

「それで俺が頷くとでも?」

「了承は求めてないから良いよ」

「…………」

「不服？」

「言葉の意味が判らなかつただけだ」

「……つづけ」

「悪かつたな。村ではそこそこ頭は良い方なんだぞ、俺は」

「自分を持ち上げすぎるとひくな」とはない。それより

「何だ」

「いつ、私を殺してくれるのかな」

数日経つた今では、殺しあう仲から、殺し、殺される仲に変わった。

鬼の身体的特徴を見分けるのは極めて簡単だ。
先ず皮膚の色は赤い褐色。
口には人肉を貪る為の鋭い牙。
最後に、額から伸びた大きな一本の牛角。
姿こそ人の形をしていても、上記の項目に当てはまればそれはすな
わち鬼であることを証明する。

およそ一日前に遡る。

鬼を退治しにきた青年は、洞窟の中で鬼と思われる者と遭遇した。

しかし、青年が機転を利かせて押し倒した鬼はまだ童。思わず出来事に混乱する青年は悩み、迷っていた。

青年は自分が馬乗りにしている子供を見下ろす。これが本当の鬼なのかどうかを確かめてみる。

「……」

肌の色は普通だ。そちらの人間のものと、なんら変わりはない。口も普通。特に長く伸びた歯も見当たらなかった。

額の角は、

短めの赤髪の合間から覗く、一対の出っ張り。肌に覆われているので判りにくいが、確かに鬼の証である角に見える。なら、この子供はやはり鬼の童、ということになる。

「…」

いや、鬼にも子ぐらいいるのは当然だ。特に驚くようなことではない。

驚くことではないが、青年にとっては心搖さぶられるものがあった。いくら鬼とはいっても、子供相手に刀を抜いてそれを突きつけ、あまつさえ間違いでも殺すようなことがあれば、人一倍曲がったことが嫌いな青年は、己れを許すことが出来なくなる。自身の良心がそれを許さないだろう。

ならば、

この状況はどうすればいいのか。

鬼の童は無表情で、抵抗するでもなく青年を見つめている。

青年は童を押さえつけて刀を喉に、腕は固まつたまま動けない。

このまま退いてしまえば童が敵意を見せないと限らないし、かといって今の状態をそのままにすることも出来ない。

次にどう行動すれば良いのか判らなくなつた青年は狼狽するしかなくなつた。

それを逐一観察していた鬼の童は、呆れて溜め息混じりに、

「…いつまで女の腹に乗つてゐる」

「え？ ッ！」

突如、

青年の身体を浮遊感が襲つた。

青年が気づいた時には、彼の身体は宙にあつた。鬼が密かに足を青年との間に差し入れて、思い切り蹴り上げたのだ。子供とは思えない馬鹿力だったが、離れた岩の上に叩きつけられ、痛みにつづくまる青年は妙に納得した。

アレは鬼だ。確かに鬼だと。

一方の鬼は、身体に付いた泥を拭きながらさつさと立ち上がり、落ちた衝撃で動けないでいる青年の元まで歩いてくる。鬼は近場に落ちていた青年の刀を広い上げて言つ。

「つづけ者。敵の根城に独りで來たばかりか、不用意に背後を取られ、挙げ句に大声を上げるなんて。他の鬼に自分の存在を気づかれるとは思い至らなかつた？」

「あ……」

鬼の言葉に青年は顔を驚き吊らせる。

全く以てその通りだつた。不意を突かれたとはいへ、それで混乱を起こし、敵地のど真ん中で叫声を上げるなんてどうかしている。愚の骨頂も良いところだ。

最早手遅れなのは承知だが、青年は辺りを見渡し、鬼の仲間がいかがどうかを探してしまつた。鬼の、それも童にこの様なのに、さうに成人した鬼が大勢奥からやつてくれれば青年は一巻の終わりだ。そんな青年の不安を余所に、鬼はとても退屈な感じで刀を器用に回して遊んでいた。二本の指で柄の部分を一、三度クルクル回すと、鬼が来ないかを気にして怯えている青年に向き直り、酷く投げやりな調子で、

「心配しなくて良い。此処にいる鬼は私だけ。他に鬼はいないから」

「……何？」

青年の不安を一蹴する一言を放つた。

川の流れる音がする方の沿場に眼を凝らしていた青年は訝り、首を鬼に戻す。鬼が他にいないとは、島を離れて何処かへ出向いている、ということとなのか。

「どうこいつことだ？ まさか、また村や町を襲いに……」

青年の語調が思わず強くなる。

目の前にいるのは鬼。もう氣を使う必要はない。武器を失い、戦う術を失つた青年はそれでも鬼を睨み上げて威嚇する。が、

「この島に棲む鬼は私だけ。この島で“生き残つて”いるのは私だけ。それより」

鬼は青年の睨みなど意にも介さず、何を思つたか刀を青年の手前に突き刺して自分も座つてしまつた。

青年の眼に、改めて鬼の顔が映される。燃えるような赤い短髪、童とは思えない凜々しい顔立ち、射抜くような鋭い眼、そして、鋭い瞳の中に、僅かな愁いと期待を入り交じえて、

「私を殺しに来たんでしょう？ もう抵抗はしないから、手早く済ませて」

両手を横に広げて、無抵抗の意思を示して、自分は今すぐにでも死にたいと、だから自分を殺してくれるよう、そう懇願して、

「殺しに…………？ 手早く済ませて……だと？」

刀の柄越しに座る鬼に見据えられて、青年は困惑せざるを得なかつた。

第参篇 鬼決 キケツ

鬼ヶ島上陸から一日目。

「つぐそ！ 何でだ！ どうしてッ！」

青年は憤っていた。目の前に立ちはだかる、難攻不落の壁に対して。どれだけ足掻いても乗り越えることが出来ない、不条理な理に対して。

「こなんものなのか……俺は、こんな程度で屈するような男なんか……！」

弱音を吐いて挫折しかける自分自身を叱咤する。

このままでは終われない。終わってはいけない。どんなに不合理で納得のいかないことでも、青年は諦めることは出来ないのだ。何度失敗しても、それを掴もうともがくしかない。

だから、

「今度こそ…………捕らえた…………ッ！」

大地を照らす太陽の下、空に派手な水飛沫が舞い散ったと同時に、近くで羽を休める海鳥達は驚いて一斉に飛び立つていった。

「……殺さない」

青年は戸惑いながらも、そう返事を出した。

「お前は、町で教えられた鬼と違う。」「……人を襲うように見えない。だから殺さない」

「今しがた襲われたのに、人を襲うように見えない？ つけも此所まで深刻だと涙が出る」

「……」

鬼はほとほと呆れ果て、青年はなんと答えたらいのか判らずに黙る。

何故鬼が童なのか、

何故鬼は一人しかいないのか、

何故鬼は自らを殺すよう頼むのか、

判らないことだらけで、頭の中の整理がつかない。

ただ一つだけ判っているのは、青年にはもう鬼を殺すという選択肢は消え去っているということ。

「…………もういい」

黙りこくる青年に苛ついたが、それとも青年の心中を察したのか、

鬼は溜め息一つを残して立ち上がる。

去り際に、

「用が無いならこの島から去れ。一度とその足を踏み入れるな」

たつたそれだけ言い残して、闇の濃い鍾乳洞内の奥へ姿を消していった。

一人残されてしまった青年は、暫くはその場で座り込んでいたが、

「出でいく? この島を、用が無いなら…………」

自分を殺せと言った、鬼の童の後ろ姿を脳裏に焼きつけて、

「俺がこの島に来たのは…………」

「……ふて寝するか」

全身を海水で濡らした青年は、岩の上で力なく呟いた。

「……貴方は何をしているのかな」

洞窟からそつ離れていない海辺。

岩場の間にある窪みに海水が流れ出来た池の横、意氣消沈気味で寝転んでいた青年が見上げると、いつの間にかいだ鬼の顔が逆さまに被さった。毎間に動き続けて体力の限界に近い青年は、ぼんやりと

しながら鬼に説明する。

「朝飯……いや昼飯を捕ろうつかと」

「もう夕刻」

顔を傾けて見てみれば、確かに西陽が島全体を照らしている。ぐうの音も出なくなりかけた青年だつたが、往生際悪く、

「……夜飯、」

「そして明日の朝食と」

最後の抵抗すら鬼に阻まれた。

「…………」

極限なまでに落ち込み始める青年。空腹も重なつてか、指一本動かすのも億劫そうで、長く息を吐いて眼を閉じてしまつ。

「……去れと忠告した筈」

そのまま放つておくと本当にふて寝しそうな青年に鬼は声色を低め、鋭く尖つた爪を光らせながら手に力を込めた。

「用が無いなら去れ、昨日そつ告げた。さもなければ、次こそ殺すぞ」

「……」

凄みを効かせる鬼の威嚇、しかし青年は何処吹く風で、上半身だけを起こし、沈む夕陽を眺めて落ち着いた調子で言つた。

「……用なら、ある」

「鬼退治、討伐。なら、さつさと」

「やうない」

鬼の言葉を封じ、立ち上がって鬼を天上から見下ろした。
青年の肩に頭が届くか届かないかくらいの背だ。こんな童に命を握
られていたとは、到底考えられないくらい。
今の青年に、この小さな鬼を斬り捨てるなど出来はしない。

「俺がこの島に来たのは、悪事を働く鬼を懲らしめる為だ。殺しに
来たんじゃない」

「懲らしめる？ 私にいとも容易く背後を盗られ、殺されかけた貴
方が？」

「そこには触れるな……」

「ホンツと咳払いして氣を取り直し、青年は鬼に伝える。昨晩から
考えて導きだした、一つの選択を。

「俺は鬼がどういうものなのかを知らない。口伝で聞かされ
た話では、欲望のままに人を喰らい、家畜を襲い、村や町を恐怖に
陥れる化け物だと聞いた。だが違つた」

「……」

「鬼の巣窟であるこの島に鬼は一人。唯一の鬼もまだ童。その鬼は、自分から己れを殺せといつ……何もかもが噛み合わない。こんなもの、納得出来るか？」

人より不誠実なことが嫌いだから。

自分で得心のいく結果が得られないのは、絶対に許せない。だから、風聞と現実の違いの真相を明かさずに帰ることは、出来ない。

「…………で？ 簡潔に言つて、貴方は全体どつしたいの？」

「見極める」

昨晩から考え抜いて、午前一杯、魚と悪戦苦闘しながら何度も反芻した言葉を告げる。

「鬼とは何か。鬼は本当に化け物なのか。鬼の真実とはなんなのか。その答えが得られるまで、俺はこの島を離れない」

「…………」

「暫く、厄介になる」

「…………………はあ」

聞き終えた鬼から出たのは溜め息だけだった。

やはり受け入れて貰えないか、と青年は肩を落としかけたが、その前に鬼が続けて言葉を繋ぐ。

「やつしたいと願つならやつすれば良い。ただし、この島で腰を座ら
なら私と誓いを結ぶこと」

「誓い?」

「どんな事実を知ったとしても、最後は必ず私を殺すように」

「……」

「その沈黙は肯定と受け取る」

話を終えて、鬼は洞窟のある方へ踵を返す。青年はまた何と答えた
ら良いのかで悩み、見送るしかない。

他殺志願。

どれだけ考えてみても謎は深まるばかりだ。一体どんな事情があれ
ば、自分を殺して下さること頼まなければならないのか。真相が明る
みに出た時、自分は鬼を殺すのか…。

いや、と青年は考察を止める。結論の出ていない今は、考えるのは
よそ。それよりも青年には、まだ鬼に聞いておいたことがあった。

「…待て。お前、名は無いのか

急な勾配の坂の上をひょこと飛んで下っている鬼に、大声でそう訪
ねた。最低でも三、四日はこの島に滞在するかも知れないのだから、

タガベリイは知つておいたと考へたのだが、

「何故？」

鬼は首を捻つて聞き返してきた。

ただ名を聞いただけなのに、質問を質問で返されるとは予想していなかつたのでまた対応に困る。

一応青年なりに言い返してもみたが、

「何故……って、名が無いと不便だらう。鬼と呼ぶのは、お前を呼んでいる気がしないし」

「名なんて無くて良い。それに、相手に名を尋ねる時は先ず自分から名乗るもの」

「ぬ…………、」

鬼の言い分に反論出来ず、仕方無いので自分から名乗ることにする。
数日後には、その半分を鬼に与える羽目になる、青年の名を。

「俺の名は
……」

第肆篇 鬼臆 キオク

鬼と青年が同棲を初めてから八日間の時が過ぎた。

「 なあ、名が無いなら俺がつけいやうつか?」

「 拙鈴」

「 きよひ? ……嗚呼、要らないってか。なんでだよ」

「 今更誰かに名を呼んで欲しいとは想わない」

「 ……気になつてたんだが、どうしてこの島にはお前しかいないんだ? 他の仲間はどうした」

「 さあ。少し遠出して、人間達から金銀財宝を奪つているのかも。だから帰りが遅く、」

「 ……“生き残つてゐるのは私だけ”。確かにそう言つていなかつたか?」

「 …」

「 討伐……殺されたのか」

「 ああ。それより、名をつけてくれるところ話だけど」

「え？ あ、そうだな。どうするか…」

「そんなに名で呼びたいなら自分でつける。貴方、桃は食べたことある？」

「あるけど、それがどうした」

「なら、貴方に桃の名は相応しくない」

「？」

「桃を食つた貴方に桃の名はおー」がましい。という訳で、食われた桃を私が貰う」

「…は？」

「私の名は桃。貴方の名は太郎。それで決まり」

鬼は自身を桃と呼び、

青年は仕方無く太郎を名乗る。

洞窟が一つあるだけの荒涼の島で、二人は仲良くなれていかないまでも、騒がしく、賑やかな日々を過ごした。

「 そういえば、桃は女なのか？」

「最初にそう告げたし、見て判別出来ない？」

「……上から何か羽織れよ。下履きだけだと男にしか見えん」

「そりゃ。……興奮？」

「するか。こんな童に」

「歳は貴方とそう変わらないと思つけど。鬼は長齢で新陳代謝も良いから、外見と実齢には差がある。多分、私の年齢は貴方と同じか、それ以上だと推測する」

「本当か？」

「真偽は定かではないけど、人の間では鬼の血を飲めば不老不死になれるなんて言い伝えもある程だし。……欲情？」

「しない」

「鼻の下が、」

「伸びてない」

「強情。それとも不能？」

「どつかれたいか」

青年は鬼の真相を探る為に島に残ったのに、なんの進展もないまま日だけが無為に経つた。鬼に直接問い合わせ正そうにも鬼は言葉を濁し、

それよりもさつさと自分を殺せと要求するだけ。そこで青年は口^ひもり、話は打ち切られてしまつ。

自身に踏み込んでもらいたくない、壁を作り上げている。が、それ以外に垣間見せる鬼との他愛のない会話や、その時にひつかせる生き生きとした表情は、嘘偽りは無いように感じられる。壁を作つている一方で、青年を受け入れようとしている節がある。拒んでいるのか、受け入れているのか……鬼の取るどっちつかずの態度は、青年が抱く謎にさらなる拍車をかけた。

「俺は此処へ何しに来たんだろうな」

「私を殺しに来た。違う?」

「違う。……お前がそんなどから、俺が悩んでいるのが判らないか?
?」

「知らぬが仏といふ言葉がある。私は貴方の気持ちなんて知らぬが
仏

「意味が判らん」

「貴方も私のことなんて知らぬが仏」

「…………」

「いい加減、折れたら? 何時までもこんな辺鄙な島に居たくない等。その刀で、私の喉元を切れば……」

「断る。俺はお前を絶対に殺さない」

「誓いを違える気?」

「知るか。お前が勝手に取りつけた約束だ。守る義務は無い」

「居候させてもらっているの?」

「……別に、この島全てがお前の物じゃないだろ」

「食事も私が用意しているのに?」

「……ただ焚き火を焚いて、魚を焼いて出すだけ」

「その魚を捕つているのは、他ならぬ」

「はい貴女様です口答えして申し訳ありませんでした」

「フフ、判れば宜しい」

「…」

「何?」

「……そんな風に笑えるのに、なんで死にたがる」

知れば知る程、鬼が判らなくなる。

「…………もう寝る。貴方は向こうで寝て。お休み」

「桃……」

鬼がどうして強がりを言っているのか、理解出来ない。

「…………笑える？ 笑っていた……私が？」

「…………笑っていた。笑ってたんだ、私。フフッ」

「…………まだ、笑えたんだ、私」

理解出来ないまま、九日目を迎えた。

鬼ヶ島と呼ばれる、鬼が一人しかいない島に青年が来て九つの太陽が巡ったその日。

青年は、鬼の真実を知つた。

鬼が自分を殺せと言つた、理由を知つた。

そして翌日 、

青年は、己れの人生の岐路に立つ。

第五篇 鬼朱 キシュウ

鬼ヶ島上陸から九日目。

お田様が程好い位置に昇つた頃合いのこと。

竿を片手に、死人でもまだましな顔をするであろう表情で海を眺める一人の男あり。

「……」

幽体離脱している訳では無い。

只今の青年は、島にやつて来てから一度として自炊が出来ていないと、鬼の、しかも見た目童の女に養われるなど言語道断！ という想いを胸に、初日に木舟を着けた場所の岩場に腰掛けて釣りをしていた。

釣竿は本島から流れ着いたと思われる竹と釣糸で、針は流石に漂流していなかつたので流木を乾かして削り、間に合わせた。針の耐久度に少し難はあるが、釣れないことはないだろうとたかをくぐり、朝方から海に挑んで早五時間。

「は、ははは……。これで帰つたら甲斐性無しつて言われるだらうな……」

本日の成果。

釣り上げた魚の数、零。
竿が引いた回数、幾百。

針が何度も駄目になり、予備を作つておいたものと交換した回数、

七。在庫、零。

結果、青年の惨敗。

「誰に敗けたんだろうな……魚か？ 桃か？ それとも俺か？」

もしくは全敗。

「小さい頃は川で良く捕つたり釣つたりしたのにな……歳は取りたくないもんだ」

まだ二十歳前後であるにも関わらず、そんなことを嘆く青年の背中は掠れて消えそうだ。鬼との約束を破る代わり、せめて食いぶちくらいは己れで得ようと考えたのに、青年の行動は全くの徒労に終わりつつあつた。

しかしこれで諦めていては男の矜持が保てない。日の出と共に始めたから昼までまだ時間はあるし、ここは路線を変更して再度手掴みに挑戦してみるか、と何処までも前向きに考え腰を上げる。

釣りを断念した青年が目指すは、現在住処として使っている洞窟。彼処には地下を流れる川や地底湖があり、淡水魚が多く生息している。火で明かりを灯してもなお暗すぎるとの理由で避けていたが、海の魚よりは川や湖の魚の方が捕まえやすいかも知れないと検討違ひの答えを出していた。

因みにそれで本当に収穫があったのかどうかは定かではない。

洞窟に帰り着くその手前、青年はこの島で初めて自分以外の人と遭遇したのだから。

「……」

先に気づいたのは青年だった。

帰りの時間を掛けまいと明朝に通つた海岸沿いを無視し、島を迂回しないでその中央、ゴツゴツした岩山が軒並み立つ悪路を選んで暫く。小高く盛り上がつた岩を登つていたところへ、前方から複数人の話し声を聞き、咄嗟にしゃがんで岩影に隠れた。

声の数は最低でも五人。青年は慎重に岩を上がって顔を出すと、予測よりも七倍強の数の来訪者達が岩山に囲まれた平地に身を潜め、どれもこれも物々しい出で立ちで氣を昂らせている。

「鬼の討伐に来た衆か……」

集まつた武士や筋骨粒々の猛者の中に、見知つた顔がちらほらある。役所でより集められた腕に覚えのある者達が、世の安寧を齎かす鬼を討ち取りに来た、というところだろう。

討ち果たすべき鬼のことなど、何も知らない者達が……、

「……で、聞きそびれてたんだがよ。島にいる鬼はもう一匹だけなんだろ？ しかも十にも満たねえ餓鬼ってえ話だ。こんな大人數連れる必要があんのかい？」

「……」

討伐衆の中から漏れ出了た言葉に、その場を後にして鬼に知らせよう

と立ち上がりかけていた青年は動きを止めた。

再び腰を低めて、柄の悪い男と鎧を着込んだ武士との会話に耳を澄ませる。

「もう少し聲音を低くせい。気づかれるぞ。……貴様の疑問ももつとも。たかだか童一人にこれ程の人手、無駄にしかなるまい」

「報酬も分かれちまうしなあ」

「侮るな。童とはいって、あれは人の肉を喰らつた鬼。役所で刈り取つたそれらとは雲泥の差がある」

「ああ、そんなようなことも言つてたか。『人を喰らうた鬼は一騎当千、天災が如く猛威を振るひ』てか。くわばらくわばら」

۷

討伐衆の口振りからして、彼等は島にいる鬼が童で、一人だけしかいないことを知っていたようだ。知っていたということは、前にも一度鬼ヶ島に訪れた者がいるということであり、島に入つて生きて帰つた者無し、という文句と矛盾していることになる。

が、これは尊の方が偽りだと青年は薄々判つていた。『騒げば鬼に見つかるが、黙つていれば助かる』という文言もあつた通り、この島に来た者にしか判らない情報が、本島の方へ伝わる筈がない。火の無い所に煙は立たないので。故に、彼等が鬼のことを知り得ていたとしても、何ら不思議がることではない。

そんな」とよりも青年は、盗み聞きした話の内容で氣になる言葉があつた。

人の肉を、喰らつた。

聞き間違いではなく、幻聴でもなく、武士の一人はそう言った。
人を喰らつたと。

人を食したと。

あの鬼が、鬼の童が、

人を、喰い殺したと。

「 食人鬼」

後方から声がした。

初日と同じく、またしても背中を取られた青年が振り返ると、そこには無表情で鬼が佇んでいる。

手に、自身の身の丈程もある、全体に刺のついた六角棒を握つて。

「人を喰つた鬼のことを私達の間ではそう呼び、忌み嫌つてゐる」

「桃」

不意に現れたことで戸惑う青年を無視して、鬼は討伐衆の隠れる岩山の方へ歩いていく。

「“掃除”するから、巻き添えを食わないように離れていて」

「お、おー！」

青年の呼び止めも虚しく、鬼は軽く屈伸して跳び上がると、討伐衆達がより集まる岩場の向こう側へ消え去った。

「鬼だ！ 鬼が出たぞ———！」

空から鬼が飛来したことで討伐衆から声が上がり、ざわめく。突然の襲撃に戸惑う者もいれば、高めた緊張を爆発させて迎え討とうとする者もいる。

鬼はそんな男達をじろりと見回すと、唐突に現れただことで慌てふためく男の一人を鋼鉄の棒で薙ぎ、黙らせた。

「」の野郎……、」

「五月蠅い」

「おぶおツー？」

腹を打ち抜かれた男は、その頑丈な鎧も意味を為さずにひしゃげ、他数人を巻き込みながら転がっていく。岩に激突してようやく武士等は止まつたが、その威力は圧巻の一言、武士達を受け止めた岩は耐えきれず、粉々に砕けてしまった。

「…………」「」

数瞬の間に起きた出来事は、討伐衆の心構えを一変させた。鬼の噂を信じきれず、へらへら笑っていた男ですら、緊張した面持ちで鬼と対する。

耳鳴りがしそうな程の静寂が包み出す中、それを引き起^こした張本人は何も気構えることなく、ぞんざいに言い放つ。

「下卑た会話が天上から降つてきて不愉快極まりない。消えて」

静寂を破つたその一言と、鬼の左手にある鈍器が軽々と振り回されたのを合図に、鬼の童を囲む男達は一斉に飛び掛かった。

青年は言葉を失っていた。

刃と刃が乱れ交わり、鮮血と叫びが舞い轟く戦の渦中。手練れの武士、無法者、その他鳥合の衆が入り乱れての大混戦の中を一人で受けて立つ鬼の童は、数の優劣も武芸の差異も関わり無く立ち回り、小柄な身体に宿した怪力を惜しみなく振るう。

鬼が一度腕を振るえば、男五人は昏倒し、

二度三度と振るつてしまえば、十人二十人は立つことすら敵わない。圧倒的なその強さは、まさしく言い伝えられている鬼そのもの。見るもの全てに恐怖を与える、鬼神の姿だ。

「あれが、桃……人を喰らつて得た、力……？」

視線を外せなかつた。

流れるような動きで男達を翻弄するその姿に、青年の眼は釘付けに

なっていた。

端然と振る舞う姿に、眼を奪われていた。

美しかつた。

ほんの少し腕を動かすだけで人を屠れるその強さが、人に恐怖しか植えつけないおぞましきその力が、深紅に煌めく矮躯を、途方も無い美しさに魅せている。

鬼という脅威を、この世に一つとない宝物か何かに映し出している。あれほど、

あれほど美しいものが、人を喰らつたというのか。

その力が、人肉を貪つて授かつたものだというのか。

あの鬼が、あれほど美しい鬼が、私欲で人を殺したというのか。

：信じられない。

どうしても信じ切れない。

あの鬼が、あの童が、

あの桃が、

あれほど優美な存在が人を喰い殺したなんて、一体誰が信じられるだろうか。

「がはッ？！」

「貴方で最後」

戦いは程なくして終わりを迎えた。大地に転がる討伐衆は手足がひしゃげ、呻き声すら上げられない有り様。かろうじて息を繋いでいるが、自力で立ち上がる者は半数にも満たない。

かろうじて。

“その場で倒された者全員がまだ息を繋ぎ、亡くなつた者は誰一人としていない。”

「…さて。貴方一人だけが残されたけれど、まだする？」

一人だけ傷の軽い、意図的に最後まで痛めつけずにおいた討伐衆の指揮官を前に、鬼が地塗られた凶器をかざす。仲間が次々と打ち倒されていくのをまざまざと見せつけられた指揮官に反抗する意志がある筈もなく、早々に刀を捨て下つた。降参した指揮官に鬼は命じる。

「其処らで寝ている者を全て連れ帰れ。一人でも残すようなら、貴方達の船を潰し、皆殺す。承知？」

「し、承知した。即刻出でいく。だから、命だけは、」

「行け」

「ひいいい！」

情けない後ろ姿を見せ、指揮官は逃げていく。話を聴いていた動ける者も、重傷者に手を貸し肩を貸し、去る。

討伐衆全員がその場を後にするのを見届けた鬼は、面倒そうに溜め息を吐き、肩の力を抜いた。

己れを狙う者がいまだ潜んでいることにも気がつかずには。

「彼奴は何をしている、狙われているぞ！」

遠方からことの成り行きを眺めていた青年には見えていた。自分の位置から僅かに距離のある岳山の上、二人の男が弓を構えて狙いをつけている。弦を引き、射ち抜く目標は鬼の頭。今まさに射ろうと手を震わせている。

「…………くそッ」

鬼からは離れているせいか一向に氣づく気配がなく、焦れた青年の足は考えるよりも先に動いた。鬼を死なせたくない、あれを死なせて良い筈がないと、それだけを脳裏に留めて青年は走る。

「間に合え…………！」

男達のいる岳山は斜面が急で登る暇はない。射出は止められない。

岩山と鬼の間、其処に自分が割つて入つて矢を止めるしか、ない。

「……太郎？」

鬼が青年へ振り向き、暢気な調子で名を呼ぶ。青年は其処から逃げろと怒鳴つて、自身は鬼の盾となるよう岩山に向く。

矢が放たれた。

その軌道の先に立ち塞がつた青年は腰の刀を抜き、斬り払おうと試みる。

風を裂き、音を抜き、差し迫つた矢を狙つて逆袈裟に斬る。

斬り上げた刀身は矢じりの先端を掠め、弾いた。

射手は一人、矢は一本。同時に射られれば打ち扱えるのは一本のみ。

一つは防いだ。残りの一つは防ぎようがない。一度に一振りのみの刀では一本の矢を止めることは不可能だ。

もう一つの矢が飛んできた。刀は斬り上げたまま引き戻す時間は無い。矢を落とす手段が無い。

ならば、

どうするか。

ツツ、

……

ツツ！

……

ツ。

薄れゆく意識の中、青年の耳に彼の者の声は届かなかつた。

第陸篇 鬼生 キショウ

青年は何故鬼ヶ島を訪れたのだろう。

鬼を退治したかつたからなのか。

鬼を懲らしめたかつたからなのか。

英雄になりたかつたからなのか。

自己満足に浸りたかつただけなのか。

それとも、

別の理由が、あるのか
。

青年が眼を醒ますと、そこは見慣れた洞窟の一隅だった。

場所の位置的にはかなり奥にある方で暗く、地上が昼なのか夜なのか、自分が気を失つてどの程度の日が経過しているのかは判らない。視界には天井から伸びる鍾乳石と右隣で燃える焚き火の明かりのみ。火が爆ぜる度に黒と橙の境が揺らいでいる中、いるだろうと予感していた鬼はいなかつた。

鬼の姿が見えないのを気にかけた青年は、身体を起こそうと肘をついて起き上がる。手足は問題なく動いたので大丈夫だろうと判断したのだが、

上半身を起こした途端、全身に倦怠感が襲い力が抜けて、半端に上げた頭は油断していたことも相まって勢い良く硬い地面に落ちた。

「ツー？ ツツ！？ ツツツ！？ ……」

堪えようのない痛みが脳神経を駆け巡る。
暫し身悶える青年。

と、手で頭を抱えたところ、ざらりとしたものに触れた。よくよく調べるとそれは布で、包帯代わりに巻かれている。左眼の上、矢が刺さったであろう部位には血がこびりついて固まっている。鬼が手当してくれたのか、とぼんやり考えた青年はぼそりと呟いた。

「しふといな、俺も……或いは、往生際が悪いだけか

「悪運が強い。僅かでも遅れていれば助からなかつた」

「…」

小声が聴こえたのか聴こえなかつたのか、焚き火の明かりが届かない暗闇の奥から声が返ってきた。そちらを向くと、魚数匹を手掴みで運ぶ鬼が焚き火の元へ歩いてくる。

鬼は焚き火の横に座ると、魚を木の棒に刺して手頃な石に立て掛ける。同じように全ての魚を火に当て終え、それから青年の方を向いて、

「…………」

じつと見つめた。

というより、睨んだ。

その睨みだけで人一人殺せるのではと思いたくなるような眼だ。睨まれた青年は物言わぬ圧力に気圧されてしまう。

「あ…………桃？」

「うつけ」

圧迫に耐えきれなくなつた青年が口を開いて、即座に鬼が黙らせた。

「うつけ、うつけ。うつけもうつけ、大うつけ。貴様の頭は鶏以下か。うつけは死んでも治らないといふけれど、貴様は死んでも治りはしない。私が断言してやるこのうつけ」

鬼がいつも以上に鬼になつてゐる。青年の呼び方も貴方ではなく貴様になつてゐるし、言葉に大量の棘が含まれている。

一方的に詰られた青年は訳も判らず、一先ず落ち着いて話を聞かせてくれと頼んだ。

「どうしたんだ。何をそんなに…」

「射手には気づいていた」

「…」

青年を睨みつけたまま、鬼は語る。

「後方から一人、私を狙っていたのは知っていた。その上で気づかぬ振りをしていた」

「…嗚呼」

「射たれてもかわすことに造作もなかつた。そんな小賢しいことをしても無駄だということを見せつける為にだ」

溜め込んでいたものを吐き出すよつこ、喋る。

「大体察することは難くなかった筈。地上に誰か来たことを地下にいる私が知れるということとは、それだけ聴覚に優れているということ。たかだか六十間程度の間合いで狙撃手の息遣いを聞き逃さないと、あの場で貴方が飛び出す必要なんて万一にも無かつたってことを、何故理解出来なかつた」

「…？」

「何故」

顔を俯かせて、頑なに表情を見せないよつこして、

「何故己れを顧みず私を庇つた。うつけ者め……」

「…………」

声が少し震えていた。

初日に出逢つてこの日まで、一度だつて青年に見せたことのない姿。高々くそびえ立つ柱のよつに揺るがなかつた鬼が、今この時にぐらついている。

その原因は言わざとも知れたこと。

「　すまなかつた。心配掛けたな」

己れの浅慮な行動による結果で、鬼に要らない氣を使わせてしまつた。そのことを反省して青年は謝り、

すどん、と。

腹底に振動が重く響いた。衝撃は洞窟内全域に伝わり、焼いていた魚は弾みで焚き火の中に落ちる。びりびりと全身が震えるのを感じた青年は、手前の地面に拳を叩きつけてめり込ませている鬼をおつかなびつくり見つめた。

若干、いや相当怖じ氣づいた青年は何も喋れず、鬼は静かな怒氣を発散させながら低く、低く唸る。

「誰が、心配したか」

「え、いや、でも」

「したか」

「……」

反論は受け付けてはくれなかつた。

最早何も言えなくなつた青年は戦々恐々としながら横たえ、それを見て取る鬼の顔は、また俯いて見えなくなる。

暫し、静寂が場を取り巻く。

それを先に破つたのは鬼だつた。

「……昔、遙か昔の御嘸。鬼の存在がまだ妖の類としてしか人に認知されていなかつた時代」

ぽつりぽつりと話し始めたそれは、この九日間一切口にしようとしたかった鬼の過去。

青年は驚き、ながらも何故急に話す気になつたのかを訝つて、

「鬼は好戦的な種族でありながら人間と関わるのを完全に絶つて暮らしていた。容姿に違いはあまり見られず、だが人間と鬼は互いに相容れぬ存在。この島に住んでいた鬼の先祖は代々人と出会うのを禁じ、閉鎖的な日々の中を細々く生きていた」

「……」

口を挟むのを止めた。どんな心境の変わりがあつたのかは知らないが、鬼の過去…鬼の真実を知るのは青年にとっては待ちわびていたことだ。なので余計な横やりを入れないよう気をつけながら、しかしどうしても疑問に思つたことだけは尋ねることにし、横になつた

まで話を静聴することにした。

鬼もまた青年の聞きの姿勢をうつむいたままで見て取り、独り言のように語り続けた。

「この島は隠れ棲むには丁度良かつた。本土からは数日掛けねば辿り着けず、偶然漂着したとしても鬼はほぼ地下暮らし、発見されることはなかつた。発見されたとしてもどうとこうとはない。この島に来た者は総じて遭難者、生きて帰らずとも本土で気に留める者はいなかつた」

「それは、まさかそいつらを…」

青年の脳裏に“人喰い”の文字がよぎる。が、鬼はすぐさま違うと否定した。

「食した訳ではない。ただ生きて帰さなかつたというだけ。……先にも伝えたが、鬼の間では人を喰うことは何より禁忌とされていた。代々語り継がれてきた暗黙の了解だから、どうして禁忌とされたのかは知る術もないけれど、その当時は誰も人を喰らうなんて考えもしなかつた。己に似通つた姿の人間に食欲など沸かないし、喰らうことで得られる“力”も、そして必要でもなかつた。でも」

一拍置いて、鬼は顔を上げる。

決然とした面持ちで、鬼がこの時まで躊躇つていた事の次第を、明かす。

「あの日、私が貴方達でいうところの十の歳を迎えた頃、奴らが來たことで全てが変わつてしまつた」

「奴ら……」

奴ら。

あの時鬼を討伐しにきた、手練れの衆。
鬼を討ち取りに来た者達。

「討伐ではない。あれは狩り」

「狩り？」

「『鬼狩り』。私怨も大義名分も振りかざさず、ただ快楽の為だけに鬼を殺戮する外道共。狩つた鬼の骸は持ち帰り、主に献上して褒美を受け取る。そしてまた狩りにやつてくる。それを幾度となく繰り返す」

それは悪夢のような話だった。

鬼が人を襲うことはあっても、人が鬼を襲うなど。

この島に暮らす鬼達には、想像すら成し得なかつた。

何故鬼の棲むこの島を人間に知られたのか、皆目見当もつかなかつたし、

鬼を狩る理由も、恐らくは権力者達の道楽なのだろうが定かではない。
ただ、

当時はつきりしていたことは、姿形が人より変わっているだけ、身體能力もさして大差なく、人より遙かに長寿であること以外に違いの無い鬼達に、数でも圧倒する人間達の襲来には敵わなかつたということ。

文字通り、狩り取られていくことになる。

「初めは抵抗した、当然。だけれど一日続けて、三日続けて、十日続けて、一月続けて、年中続けて、何度も攻められては数を減

らされ、その都度果敢に戦い、討ち死にした仲間の体を嬉々として持ち去られていく光景を見せられると、同胞も、私の親も、抵抗する意欲すらも次第に狩り取られていった「

まさしく、悪夢。

騒ぐ血を抑え、みすぼらしいながらも平穏に暮らしていたものを、誰であろう関わりを避けていた人間達に奪われた。

理不尽な略奪に憤激するも、返す手は存在しない。禁を破り、人を食して力を得ようという案も、鬼としての矜持が許さない。『食人鬼』に身を堕とすくらいならば、いつそ殺された方が良いと考える者しかいなかつた。

そういうしている内に、仲間はまだ童だった鬼とその母親を残し、全て狩り殺されることになつた。

たつた一人この島に残され、ゆるりと絶滅させられるしかなくなつた鬼と母親は、何時に入人がやってきて自分達を狩るのだろうかと、震える日々を過ごす。

「怖かつた。恐ろしかつた。この島を出て別の安住の地を探そうにも、たつた一人では途中で頓死するのが闇の山。どうすることも出来なかつた」

残された道は僅かしかない。

島を出るか。
自決するか。
もしくは、

「母上は私の身を憂いた。まだ幼子でありながら命を落とさなければならぬ運命を憐れんだ。そして、」

そして。

母親はついに、他の多くの者が守り抜いた禁を、人を食う禁忌を、侵すことを決めた。

もう何度目となるのか、人間達の襲撃に鬼の母親は一人で立ち向かつた。

右腕と引き換えに相手の肩に喰らいつき、

得た力で襲い来る人間を猛然と打ち払った。敵の攻撃もかわせるだけかわし、かわせずとも構わず前に前進し、半刻が過ぎた頃には、その日にやつてきた人間全員を屠つて捨てた。

島には幾百の骸と、傷だらけで満身創痍の母親が残る。そして殺し合いが終わつたのを悟り、地下から這い出てきた鬼の童が見たものは

…。

「母上は死んでいた」

「…ツ」

「過度の手傷を負わされ、致命となる傷を負つて、それでも倒れることなく、息を引き取つた。私を守る為に、その命を燃やし尽くしてくれた」

母親の壮絶な最期に、残された鬼は眼を背けなかつた。

愛する子の為に禁忌を侵して、自身の為に死力を振り絞つた母の生き様。

結局自分が死んでしまえば、生き残つた子にも明日はないと判つて

いても、絶望を『える』ことになったとしても、生きていて欲しいと願つてくれた。

その最期は無駄死にに終わるといつことを、厳然と受け入れて闘つたその背中…。

気高く、雄々しく生き、死したその姿を、鬼は網膜に焼きつけた。これ程強い母を、強くあろうとした母の死を、無駄になどしたくない。させてなるものか。

母が自分を愛してくれたように、自分もまた、母を愛していた。だから、母が我が身を賭けて願い望んだ結果を、無に帰すようなことだけは許さない。

生きてやる。私は最後の最期まで抗い続けてやる。どれだけ襲い来ようが、どれだけ殺しに来ようが、私は、私だけは生き延びてやろう。仲間が朽ち果てていったこの島で、母上が死んだこの島で、母上がそうしたように、母上が望んだように、一人で生き続けてやる。

その為に、

一人で生きていく為に、

私も、力を得よう。

「…その時、なのが。お前も、人を」

「喰らつた。母上の傍らに転がつた、母が最後に殺したであらう男の死肉を、貪つた」

酷い味だつたと、笑いながらに言つた。

むせかえるような甘酸っぱい匂いと、口に広がる鉄の味。ぶにぶにとした肉の感触を嫌という程味わいながら、人一人を平らげた。

最低最悪の行為を終え、
鬼は立ち上がる。

全身に満ち満ちる力を解き放つよつと、元氣に走る。
ただ、空に向かつて咽び喫く。
これから歩かなければならぬ絶望の日々を、
うちひしがれることなく、折れることなく、悔やむことも諦めることもせずに、
歩み続ける、その為に。

最後の最期まで、足掻き続けるよつと、元氣に走る。

絶対に生きると、生き延びてやると、心に誓つた。

「…………待つてくれ。それだと話が合わなくないか？」

会話を遮つて青年が言つ。その話に嘘偽りがないのは青年にも充分察せられるが、しかし、

「最初に出逢つた時、お前は言つた　　“殺してくれ”と。今の話が本当なら、どうしてそんなことを俺に頼んだ。それに、なんで俺なんだ？死にたいと思うなら、死ぬ機会は今まで幾らでもあつただろう。どうして俺を選ぶ？」

鬼の過去と真相、現在の鬼の行動と願望は、どう取り合つても交わらない。

矛盾している。

生きると誓つたのに今は死にたいのは何故か、追及する青年に、鬼は自嘲気味に笑う。

笑つて、逆に聞く。

「太郎はこれまで、己がこゝと決断した事柄を貫き通せたことがある？」

「…それは」

「結論は皆無、私も他聞に漏れず、折れた。決心した後から数十年。精神的には二十の歳だつたけれど、私は度重なる襲撃に疲弊しきつていた」

何年も経ち、何十年も過ぎ、世代が変わつても鬼狩りは終わらない。幾ら追い払つても人間達はしづとく粘り、鬼の首を狙つてくる。

幾度も、
幾度も、
幾度も。

それこそ死んで、いつそ楽になつた方がどんなに幸せか判らなくな
る程に、だ。
鬼でなくとも、折れるというものだらう。

「それでも私は闘い続けた。島に押し寄せる愚団共に命を奪われる
など、私には許せる筈も無い。だから私は殺されもせず、死ぬこと
も出来ず、無為に無意味な一生を遂げていく筈だつた」

筈だつた。

そう　桃太郎という青年がやつて来るまでは。

「初めてだつた。たつた一人でこの島に来訪した途方も無いうつけ
者は。島を埋め尽くす程の数でも返り討つてきたこの私を、たかだ
か一人で相対そだなんて、命知らずにも限度があるというもの」

「…………」

「久方振りに可笑しい思いに囚われた。嗚呼、世にはこんな阿呆もいるのか、人間の中にはこんな人間もいるのか、と」

鬼のことなんて何も知らない癖に。

人の噂に流されるだけ、中身の無い正義を振りかざして。
けれど、その志は何処までも真つ直ぐで。

疑うことをしないから噂に流され、愚直にも独りでこんなところへ
やってくる。

馬鹿で、阿呆で、間抜けな、うつけ。

だから、思つた。
だからこそ、選んだ。

こんなに真つ直ぐな青年なら。

こんなに愚かな人間なら。

内側が隅々まで汚れている人間よりも、愚かで、しかし曇りのない
まつたらな内面を持つたこの男になら、

「殺されても良い。そう私の心は至つた」

「…………」

死にたくても死ねない状況にいた鬼の元へ青年が来たのは、奇跡と
しか言いようがない。

これはきっと、神とやらが鬼に与えた一生に一度の最後の機会。塗
炭の苦しみを味わった鬼への、せめてもの慈悲なのだろう。
だけど、

「貴方は私を殺そつとしてはくれなかつたけれど」

「そりゃ、だな」

鬼を懲らしめに、もとい説得するという名目で来た青年には、鬼を殺すことなど念頭にも置かなかつたし、その上こんな身の上話を聞かされては、不可能事に近くなる。神は慈悲どころか、更なる苦惱しか与えてくれなかつたという訳だ。

「そりだが……」

「救えないのか。

もう殺す以外に鬼は救われないのか。身体自体に問題は無く、心だけに傷があるなら、その傷さえ癒せば死ぬ必要なんてないのではないか。他にも、何か別の道があるのでないのか。

以前ならともかく、今ならば選択可能な道が、あるのでは。

「……そりだ。島を出ればいい」

妙案を閃き、落ち沈んでいた気分を吹き飛ばように青年が声を荒げる。

「幼子だつた頃とは違つて、今は本土に渡つても野垂れ死にはしないだろう。それで、他の鬼を捜せばいい。鬼はこの島だけに棲んでいた訳じゃない、そりだろ？ 仲間を見つけて、そこで生きれば……！」

「それも、考えたけれど

見いだし掛けた活路に、鬼は笑つて否定する。とても、とても寂しく、とても淋しげで、ぼろぼろに錆び付いた、笑みを浮かべて。

「仲間が死ぬところは、もう見たくない」

「…………あ」

鬼狩りは、

この島だけに行われていたのか？

否だ。

島に鬼がいるという情報が漏れただけで、わざわざ人を寄越すだろうか？

否だ。

そうでないなら、鬼狩りはいつから始まつたのか？ それは、“何処に棲む鬼を対象にしていたのか”？

当然 、本土の方でも、鬼狩りは行っていた。

そして鬼は、その仲間達と合流しても襲われるだろう。襲われても、生き残ることは出来るだろう。

でも他の鬼は？

人を食つていない、通常の鬼が生存する確率は？

「生き、残れない。桃のよう^に、人を喰らわない限り……」

「堂々巡り。同じことの繰り返し。また私だけが生き延びて、絶望して、死を切望する。そんなのは、私は嫌だ」

そうして二人は、また黙つた。

鬼は最早自分から話すことはないと青年の問いを待ち、青年はその鬼の視線を正面から受け止めずに背けるしかない。
受け止められず、背ける。

「…………どうして今、それを話したんだ。桃」

沈黙が長引くのを嫌うようにして、青年はふと思い出したことを口にした。

最初に思つた疑問。青年から問つならまだしも、自分から話し出しだのは何故なのか。

それに対する返答は、単純かつ明瞭なものだった。

「貴方にこう告げる為。…………聞きたがっていた事柄は全て話した。だから帰れ、“桃太郎”」

第漆篇 鬼哭 キコク

通常ならば、ほんの数日過ぎただけの相手に特別な感情を抱いたりすることはないだろ？世には一目見て惚れたりする者もしばしばあるが、それはあくまで外見に見惚れただけで、実際に相手の一面を覗き見れば、想像と現実の違いに幻滅し落胆するのが殆どだ。鬼の場合は。

一日惚れではないが、青年に対しかつての同胞達の面影を重ねたのは、鬼の過去を顧みれば、無理からぬことといえよう。人間である青年が同胞と準えられる訳はないので、強いて言えば仲間だが。数十年振りに仲間と過ごせた、ことになる。

しかしそれ故に、青年が身を呈して己れを庇い、倒れた瞬間を目の当たりにして気づいてしまった。

これ以上、この男と共に過ぎ去るはいけない。

また、仲間を失うことになる。そう錯覚してしまう。

鬼は島を出て他の同胞を捜すのを嫌った。

理由は、幾度も見てきた同胞の死を、またその眼で見るのに耐えられないからだ。同胞ではなくとも、それに準じる仲間として同一視した青年が死ぬところを、見たくなかったから。だから、鬼は青年に帰れと言つた。

もうこの島にいてくれるな、と。

貴方は私を救えない。私を苦しめるだけしかない。
だから、

もう、関わらないで欲しい、と
。

青年は鬼の真実を知つた。

鬼が自分を殺せと言つた、理由を知つた。

何処までも救われぬ運命にある鬼を救いたい、そう想う己れを知つた。

救いたいと想つても、鬼の他殺願望を叶えてやれない、以外の道を示すことも叶わない己れの無力を、思い知つた。

では、どうしようもないではないか。

人々を苦しめているといつ鬼の棲む島へと出向く、

そこでもしり苦しんでいる鬼と出逢い、救いたいと願つた。しかし、

己れが鬼と関われば関わる程、鬼を苦しめる結果となつてしまつた。
ならば、

俺は、鬼と出逢つべきでは、無かつた……。

青年が島に上陸してから、十日目。

瀕死の重傷を負つたので随分日が経過したのではと青年は気にしていたが、実際は一日も経つていなかつた。青年が起きたのはその日の夜、現在は鬼の話を聞いた翌日のことになる。

島を覆う空は、青年が来た時と同様に曇つていた。
波も僅かに高く、風も強く吹きすさぶ。もう暫くすれば、雨が降りだして荒れるだろう。そうなれば小さい小舟など軽く流されて遭難するか、転覆して海の藻屑となつてしまつ危険がある。

「… そつなるのも一興、か」

独りじちて、青年は岩に引っ掛けた縄を解いて小舟に乗り込んだ。舟は波に流されながらも、一応最低限の航路を維持しながら漕ぎ進んでいく。草木一本も生えていない島は徐々に視界から遠ざかり、

「… 結局」

櫓を持つて漕いでいた両手を止め、青年はもう一度だけ、島のある

方角を眺めて思つた。

「なんで死を望みながら笑えるのか、それだけが判らなかつたな」度々見せたあの楽しげな笑顔。

それを一片程も理解することなく、青年は鬼ヶ島を一人で去つていつた。

.....。

視界が、不明瞭だ。

腕に力が入らない。足にも、全身にも。軽く振り回せていた鉄の棒も、今の私には持ち上げることすら出来ない。

何故、自分がこんな窮地に追いやられているのか、理解すら出来な

い。

もしかすると、あの“噂”は真実で、“加えて知られる事柄があつた”のかも知れないが、それならそれで、良いと、思った。

どのみち、もう終わりにしたかった。
これで全てに、決着がつくなら。

「は。ハハ……、連日で責められるのは、初のことでは、無いのだけれど、ね……」

私の周りを、人間達が囮んでいる。

“桃太郎”が島を出て、それを確かめるべく地上へ出た矢先に現れた人間達。

私を狩りに来た、愚図共。

前日のように、片付ける筈だった。

気分は暗く落ち沈み、鬱を払う捌け口を欲していた。それに合わせたかのような鬼狩り衆の襲来に、気持ち的にはさらに鬱になついたが、鬱憤は晴らせるだろうと、思っていた。

思い込んでいた。

「ひやつひやひやひや。どうしたー？元気が無えじゃねえか。おら、折角これだけの人数揃えたんだ。もう少し粘れよ？」

「黙、れ……」

「ははっ、弱々しい声で言われてもなー。痛くも痒くもねえし。な

ーにが『食人鬼』だ、人つ子一人殺せねえでよ』

男の一人の挑発に、言い返す気力も無い。殺せないのではなく殺さないのが私の主義、貴様らとは違い、私は無益な殺生はしない。なんて負け惜しみすら、言う体力が無い。

そうだ。たとえ本気で殺そうとしたとしても、今の私には到底不可能だろう。普段、自分が發揮している力が感じられないのだ。まるで、人を喰らう前の自分に戻ったかのような。

でも、これで良い。

原因は判らないが、これならある程度諦めがつく。

これでようやく、死ぬことが出来る。

欲を言えば、やはりあの人間に殺されたいと願う自分もいるが、こればかりはどうしようも無い。

彼処で殺すことを躊躇つからこそ、私はあの人には殺されたいと思つたのだから。

他よりも馬鹿で、阿呆で、底無しのうつけ。

一際甘くて、一際優しい。

そんな人間に、殺されたかつた。

そんな人間に、殺されたかつた。

叶わない夢だとしても。

叶えられない幻想だとしても。

本当は、

本当の、本当は、

もうしまばらくで良から、共に過ごしていったかつたけど。

だとしても。

あの人はもういない。

私の願いを聞き入れ、この島を去った。

己れの無力を噛み締めながら、去っていった。

去るしか、無かつた。

……それで、良い。

こんなに辛い思いしかしないのなら、堂々巡りにしかならないのなら、此処で、終わらせてしまえば。

もつ一度と、希望を抱かぬよう。もつ一度でも、願わぬよう。

一瞬の元でも、時間を掛けてでも良いから。

私を、殺して

、

「ま、いいわ。それじゃあさくさく“手足をもいで、城の方へ連れ
ていこうか”

「…え？」

男の言葉が、脳天を殴りつけた。
何を言つてゐるのか、理解に苦しむ。その言い方ではまるで、
まるで。

「殺さない、のか？」

「んー？ … 鳴呼、殺さねえよ。なんでかつていつたりそりや、」

「生きていた方が色々楽しめるからな」

男は、涼しげな顔で言い放った。
悪びれる様子もなく、それがどれ程非道で残虐極まりないことなの
かも知らずに、

「お前、良い顔立ちしてるだろう？ 男か女か知らんがよ、最近の
城主様は“そつちの趣味”を好んでるんだ。で、そうするとやっぱ
り、死体じや盛り上がらんだろ？」

「…………」

「心配するなよ。手足が無くても飯は喰わせて貰えるだらうし、何
より殺されることが無いんだ」

「、」

運が良かつたな、死なずに済んで。

「…………は

死なずに、済んで……。

「…………はは、は

良かつた……だと……。

「…………ハハハハハツ」

それが一体何を意味しているのかも知らず……ツ。

「アハハハハハハハハハハハツ」

喜べ、と？

「…………ツふざけんな！－！」

無意識に動いた。

武器も持たず、散々痛めつけられた身体を無理矢理に稼働させて愚団に突進する。

筋肉を引き千切らんばかりに腕をしならせ、力任せに薄汚い顔に拳を叩きつける。

愚団は油断していたこともあり、後方へ倒れて情けない叫び声を上げる。

「ぐおお…………ツ、く、の、やりやがったな糞餓鬼！」

無様ながらも、怒りを優先させた男が甲高く吠えて刀を抜く。眼に

は殺意がみなぎっている。

私を殺そうとしている。

でも私は、もう殺されたいとは考えない。

そんな些末事などかなぐり捨てて、とにかくこの激情を愚図共に知らしめたい。

色々楽しむ、だと？

がむしゃらに殴り掛かる私に対し、鬼狩り衆は包囲を壊さず遠巻きに斬りつけてくる。

死体では盛り上がらない、だと？

いたぶるよに全身を、だがやはり殺す意図は無いのか、急所だけは外して、

あれだけ、私の仲間を殺しておきながら。

ずたずたに、体中血でまみれながら、それでも私は止まつとませず、

あれだけ、私達の命を弄んでおきながら。

やがて足がほつれ、否応にも足は止まり、

まだ、足りないのか。

鬼狩り衆は笑い、その声に虫酸が走って、なのに手足は動いてはくれない。

まだ、満足しないのか。

歯を喰い縛つて、腹の奥底から憤怒の咆哮を上げても、

まだ、絶望を与え足りないのか。

悔恨の涙が止めどなく流れても、奴等には微塵も伝わることもなく、

まだ、苦しめといつのか。

内、一人が私の髪を掴み、眼の高さまで持ち上げてせせら笑う。血と涙でぐしゃぐしゃになった私の様を、心から、愉しんで。

まだ、死なさせてくれないのか。

助けて。

誰か、助けて。

幾度も、幾度も望んでは諦めてきたけれど。

やはり、無理だ。

死ぬことすら、許されないなんて。

救いを求めることすら、赦されないなんて。

鬼、だから。

忌み嫌われし存在だから。

救われてはいけないといつのか。

……嫌だ。

……そんのは、嫌だ。

……助けて。

……誰でも良いから、助けて。

……誰でも良いから、私を、

「邪魔するやつ」

男はぽかんとして自分の腕を見つめた。

髪を掴む手は緩み、私の身体は音もなく地に着く。呆然と見上げた私は、男の腕に一本の刀が刺さっているのを視認する。

「…………あ？ 何だ、ハ？」

刀の柄を握っているのは、島を去った筈の人間。血の滲んだ布を額に巻いた彼は、固く、硬い表情のまま手首を軽く動かして腕を真つ二つに切り離してしまった。腕は血飛沫を上げながら落ちて、其処でようやく男は血相を変えて聴くに耐えない声を発する。

断末魔が湿った空気を震わせる中、彼は男など眼中に入れずにの方を向き、一言謝った。

「悪い、 “桃” 。遅くなつた」

息が、上がつていた。

どうやら島を出た後、鬼狩り衆の船を偶然見つけて、慌てて引き返して来たらしい。そんなことをしなくても、通常の私なら問題無く返り討てると知っていたのに。

私の体調不良を見抜いていた？

否、違う。

放つておけなかつたんだ。

私がまた襲われると知つて、理不尽な暴力を振るわれると知つて、見過ごせなかつたのだ。

馬鹿で、阿呆で、途方も無い大うつけ。

『大』どじろか、『超』を三つ付けても足らない程の、底抜けのうつけ者。

自分だって、怪我を負っているのに。

手負いで、万全でもこの数に敵わないと熟知しているのに。

それでも彼は、戻つて来た。

その行為が、また私を傷つけてしまつといつのに。

私を、救いたいが為に。

「なんなんだ、てめえは。同業か……横取りするとか言わないだろうな」

唐突に現れた彼を前に、鬼狩り衆はまじついていたが、その内に腕を斬られた男とは別の者が、気を取り直して問い合わせてきた。他の者も、身内に危害を加えられたことで敵と認識し、臨戦体勢を整える。

そうした中、彼は鬼狩り衆を一通り見回して、こともなげに言った。

「いや、助ける」

反応は無論、爆笑だ。

「ハハハハッ！ 助ける？ 鬼を？ 人であるてめえが？ 「冗談も
休み休み…」

「関係あるか」

「ああ？」

笑われ、侮辱され、ながらも彼は揺らぐことなく刀を構えた。己れがこいつと決めたことに絶対的な自信を持つて、確言した。

「俺はこいつを助けたいと思った。だから助ける。文句があるならさつさと掛かって來い。全員、面倒見てやる」

その一言で。

鬼狩り衆は、笑いを止めた。

代わりに、彼と私へ一斉に掛かってきた。

多対一。

凡そ三百数十対、たったの一人。それも私を庇いながらの戦い。到底、勝ち目は、無い。
だが、彼には迷いも、無い。
私を守る為に。
私を助ける為に。

私を、地獄から救い出す為に。

「節介だらうがなんだらうが、俺には、やつぱりこれしか道は無いんだ。……それが俺の、正道だ」

生暖かい風が、青年の頬を撫でた。

刀は半ばで折れ、着物はあちらこちらで裂けている。その様相を見れば、如何に戦いが熾烈を極めたかを物語っている。

奇跡、としか言い様がなかつた。

勝算は皆無。何処にそんな要素があつたのか、青年にすら判らない。が、現にこつして自分は生き延び、鬼狩り衆が敗走しているのは紛れもない事実だ。

戦いは、青年の勝利で終わつた。
誰一人殺すことなく、
戦いを、終わらせた。

「不利な状況に不利な条件を重ねるなんて、うつけ此処に極まれり

といったところか

激闘を制した途端、地面に倒れ込んで動けなくなつた青年に、鬼は嘆息しながらそう言つ。身体の傷は持ち前の治癒力で既に塞がり、血の気が失せている以外は何処も異常は見当たらない。傍目から見ただけでは普通だ。

「何故殺さなかつた？ 殺して欲しかつた訳では無いけれど、そうすれば彼方も尻込みして優位に戦局を運べた。まあ、敵に情けを掛けるのは、貴方らしいといえば貴方らしいけれど」

いつも通りの苦言。普段と変わりない鬼に、青年は刀をその辺に投げ捨て、肩を竦めた。

「そう言われても、な。俺はただ、どこの鬼の童の真似をしただけだし。それより桃、傷は大丈夫か？」

「私の心配より自身を心配しろ。本当に無茶をする。その怪我で、どうすればあれだけの人間を退けられるのか…」

再び愚痴つて、鬼は青年の隣に立つ。顔は曇り空の切れ間から覗く夕暮れに合わせ、青年を見ようとはしない。

「…ありがとうございます」と感謝しておく

前触れなく、鬼は言った。

青年からはその表情は見えないが、どんな顔をしているかは察しがついたので、青年も疲れきつた身体に鞭打つて立ち上がり、共に夕陽を眺めた。

「礼は良い。感謝されたくてした訳じゃないからな。俺がお前に望むとしたら、それは死ぬなってことぐらいだ」

「死ぬな、か」

「そうだ。：なあ桃、島を出ないか？　こんな逃げ場の無い場所でいるより、本土の方が奴等を上手く撒ける。死んで楽になろうなんて考えも変わる」

「島を、出で」

「幸せになれよ。お前には、その権利がある。このまま此処で朽ちるなんて、俺は認めない。腕すくでも引っ張つて連れ出してやる。お前が幸せになれないなら、俺が無理矢理にでも幸せにしてやる」

「…………くつ」

と、青年がそこまで言つと、鬼の方から笑い声が聞こえた。

「太郎は本当にうつけだな。私がそんなことを望んでいるなんて、一言も言つていない」

「言つてないだけで、望んでいるだろ？」

「さあ。確かに望んでいないと言い切れないけれど、ね。でも、公言していないなら望んでいないのと同じ」

「なら」

青年は鬼より少し前に出て、振り返らずに聞く。

「お前は、何を望むんだ」

その言葉は、確認だつた。

青年がこの場に辿り着いた時、鬼は泣いていた。どんなやりとりがあつたかは判らないが、流した涙にはきっと鬼の心に何らかの変化を与えたと、青年は思っていた。

だから、今なら、手を差し伸べれば、その手を掴んでくれると、信じた。

きっと、生きる方の道を、選んでくれると。

例え死ぬ方を選んだとしても、こういうして何度も助けに来てやればいい。

そう考えて、青年は鬼の返答を待つ。

「私の、望みか」

だが。

「もうだな。今ならはつきりと言える。私の望み、それを貴方に打ち明けよ」

青年は、もう少しだけ思慮深くなつていなければならなかつた。いや、せめてその言葉を、鬼の顔を見据えながら伝えていれば。

気づいていた筈だ。

「私の願い。それは……」

鬼が笑つて、青年の横に立つたその時から、

「願う」とは

その時から。

「今度こそ、貴方を、殺害する」

鬼の顔には、苦痛に歪んだものしか映つていなかつたということを。

「え……」

腰に、衝撃が走った。
腹に違和感を覚えた。

見れば、青年の腹部は裂け、真っ赤に濡れた小さな手が突き抜けている。

遅れて、全身の感覚を激痛が、気が狂わんばかりの痛みが支配する。

「も……も？」

“あわあわ”、と首を動かし、青年はよつやつと鬼を見て、

「私は桃じやない。名はもつ無こと、告げた」

酷薄なまでに冷笑した、この十日間一度たりとも田にしたことのない表情を垣間見て、

「いい加減、茶番劇は終幕にしよう、『桃太郎』」

「ガ……ツー？」

貫通した腕を抜かれ、青年は地に倒れ伏した。

止めどなく流れる血液。

痛みと、先程の戦闘による疲労から意識が混濁してぐらぐらする。鬼が半月状に裂けた笑みを携えながら何か喋っているが、切れ切れにしか理解出来ない。

「…………しの…………調が…………れない。故…………なた…………肉を食…………、今一
度…………らを手に…………直す」

「なん、で…………お前が、こんな、こと…………」

朦朧とする視界の中で、鬼がゆっくりと近づいてくる。
己れの血で紅くなった手を、一つの凶器に代えて。
一步進む度に、青年の残りの寿命が削られていく。その現実を前に、
青年は恐怖する。

殺される?

鬼の手から逃れようと、必死になつて後退る青年。

俺は、死ぬのか?

鬼はその情けない姿を嘲笑して、じわじわと距離を詰めていく。

鬼に、殺される。

掠れる思考を奮い立たせ、何故こんなことになつていいのかを考え
る。考えるが、鬼が急に自分を殺そうする理由など、思いつきはし
ない。

助けに、来たのに。救いに、来たのに。殺、される。

どう考へても、アレは自分の知る鬼ではない。アレではまるで、人
伝に聞いた極悪非道な鬼ではないか。

嫌だ。

違う。そう否定しても、鬼は止まつてくれない。右手の凶器を振りかざし、青年の首を狙つて突き出す。

嫌だ嫌だ嫌だ。死にたくない。俺は、俺は……ッ！

逃れられない。手刀は寸分の狂いもなく自分を刺し殺す。逃げ場はない。逃げられない。それでも青年は足搔いて、手足をばたつかせてみつともなく這いつくばつて、

シニタクナイ。

手に触れた固い何かを掴み、無意識に、それで鬼の手を払った。

「……」

放つた後で、青年は自分が握り締めたものを確かめる。

それは先程投げた、己れの刀。ぼろぼろに刃こぼれした上、刀身の半分近くが折れて消失している刀だ。

しかし、切れ味はほとんど損なわれていなかつた。肉を斬つた感触があつたからだ。

「……あ

そこで、またしても遅すぎながら、青年は気づく。

「あ、ああ……あああ……」

空に吹き上がる鮮血を眼にして、己れが何をしてかしたのかを、知る。

鬼の腕と、首が、
“消えていた”。

胴体だけとなつた身体は力なく崩れ、一瞬後に宙を飛んだ腕と頭が落下し、青年の目の前にぼとりと落ちる。

丁度青年を見上げるように、僅かに斜めに傾いた“それ”的表情は、

待ち望んでいたものを手にした者の、喜び、安らかで穏やかな、

微笑みだつた。
。.

第捌篇 鬼赦 キシャ

人は誰しも己れに嘘をつけない。

危機的状況に追い詰められた時、本能と理性、どちらを優先するかなど。

論議するまでもない。

人の倫理感ほど、あてになるものはない。

其故。

己が心に反する行動を取つたとしても、その者に罪があることには、ならない。

雷鳴が轟いた。

稻光が島全体を何度も照らし、凍りつきそうなほど冷たい雨粒が間断なく降りつける。数多の血を吸つた大地は恵みの雨を受け、渴きを潤しながら血を洗い流していく。

島で一人、たつた独りとなつた青年は、肌を打つ雨に濡れながら、膝についてその場から動こうとはしなかつた。

鬼の頭を、両手に抱えて。

己れの命惜しさに絶つてしまつた、童の命。

その顔には、末長く待ち望んだ安寧を手に入れ、幸福に満ち足りた表情を作っている。

生に絶望して、死を切望した者の末路。

幸せそうな表情だ。

本当に死んでいるのか、ただ寝ているだけなのではないかと、疑いたくなる程に。

でも、死んでいる。

息絶えている。

だからこそ、安らかに眼を閉じている。

鬼は、救われた。

鬼自身が望んだ結末だ。だから、救われた。鬼は、そう言い切る筈だ。

だけど。

死に安らぎを見出だしたのは、それしか道が残されていなかつたらだ。

鬼だつて、最初から死にたいとは思つていなかつたのだから。

状況が、鬼を死に追いやつたのだ。

なら、鬼は真の意味では救われていない。

何処をどう考へ抜いても、救済されていない。

追い詰めただけだ。

鬼狩り衆が、鬼の同胞が、鬼自身が。

青年という存在が。

鬼を永遠に、救えないものにした。

悔やんでも、最早手遅れだ。

後悔など、するだけ鬼を辱しめるだけだ。

そうとしても、青年は悔やまずにはいられない。

己れを、恨まずにはいられない。

出逢わなければ良かつたのに。

関わらなければ、良かつたのに。

要らぬ世話を、焼かなければ良かつたといふのに。

それが、“青年が鬼ヶ島に来なければならなかつた、最大の要因であつた”といふのに。

「全く…… アイツの言ひ通り、とんだうつけ、だな」

雨音に消されそつなか細い声で、青年は喋る。
誰もその声を聞くこともなく、
自分に語り掛けるよつこ、言の葉を紡ぐ。

「何の為に、この島へ來たと、思つて、いるんだ。俺は、何しに、此処へ…… 来た」

「我を失いかけていた。
己れの身の異変に気づく」となく、
喋り続ける。

「鬼を、退治する為？ 鬼を、懲らしめる、為？ ハハッ、馬鹿馬鹿しい。そんなことじやない。そんな、真つ当な理由じやない」

青年は気づかない。

何故、鬼がこれまで圧倒していた鬼狩り衆に良い様にされていたのか。

何故、鬼の体調が優れなかつたのか。

何故、頭部に矢を受け、生死をさ迷つた自分が鬼狩り衆を追い払えたのか。

何故、急所でないとはいえ腹を貫かれ、致命となりうる傷を負わされ、自分が生きていられるのか。

何故、

貫かれて間もない、致命傷である筈の腹の風穴が“既に塞がつてい

るのか”。

「俺がこの島に来た理由は……」

青年は、気づかない。

「来たのは……ツ」

気づけ、ない。

遠方から密かに狙う、鉄製の円筒に繋がる縄の種火が、雨に濡れながらも火薬に着火したことを。

「……………もうが。…………に当て…………つたろ？　これじゃ…………」

…………だな…………

「……、」

何が起こったのか、青年には判らなかつた。

耳鳴りが激しい。

五体が満遍なく痛んで、指一本すら動かせそうにない。

「…………く見ろよ。このく……なで斬られてるぜ。爆風で千切れたなら、こんな綺麗な断面にはならんだ」

視界と意識の方が先に回復を始めた。視界の半分は岩に覆われ、残り半分は雨と、その奥で岩と垂直に、真横に伸びる人の姿が幾つがある。

切れ切れに聴こえていた話し声も次第に明瞭に、雨音にも負けない大音量で聴こえ始める。

「て、ことは……そこで転がってる奴が先に仕留めたのか。余計なことをしてくれる」

男の言葉を、途切れがちの思考で何とか理解する。

「全くだ。生かして連れ帰つた方が高くつくつてのに」

……そういうことか。

……、

『生かして、連れ帰る』。

それが、鬼の涙の訳か。

だから、嘆いたのか。

そして、また絶望したのか。

イキるミチを、エラバなかッタノ力。

「ま、そつがつかりすることも無いか。これでも、持つていけば一応は引き取ってくれるだろ」

男達は言いながら、鬼の首やら身体やらを手荒に掴んで、その場を立ち去ろうとする。

生きて連れ帰る目的だつただけに、誰も喜んではいなが、予定は狂つても、鬼の身体は持つてこいつとする。

その判断が、間違いだと知らずに。

男達は、鬼の童の死骸をそつとしておくべきだった。

当初の目的は失われた。その時点で、諦めていれば良かつたのだ。欲に任せて行動し、死した鬼の童を辱しめよつとしなければ、

変質し始めた存在を真に覚醒させることも無かつた。

「いえ、ツ……」

「いえ、ツ……」

不穏な音が、先頭を行く男達の耳に届く。

先頭が不審に思う前に、ぱしゃりと何かが水溜まりに落ち、全員が振り返る。

最後尾には、殿を務めていた男と、其処らで転がっていた筈の青年。青年が男を抱え、虚ろな眼で男達を見回し、男達は戦慄した。

口には、男の頭皮と髪の毛が付着していた。

男の頭は半月状に欠け、びくりびくりと痙攣している。

男の頭を喰い千切り、おぞましい動きでゆつたりと喉を鳴らした青年は、

人の肉を、食す。

恐ろしかつた。

老獣は、そんなつまらない感想しか、抱けない。
抱いている暇など、ない。

何時もなら念入りに磨きあげられた城中の廊下も、今は見る影もない。

左右の趣ある意匠をあしらつた障子は所々ずたずたに、血痕が斑飛び散つて空間を圧迫している。
廊下をひた走る老獣をからめとつて逃すまいと、言い知れぬ不安を与えてくる。

「ひつ……ひつ……ひが！？」

角を曲がった所で何かに躓き、転げた。

悪態を吐いて身を起こし、何に躓いたのか、確かめる余裕もないのに振り返つて、

「…………」

全身の血が固まった。

人だ。

城内の者だ。

老獣に仕えていた者だ。

既に、“元”の形は、成していない。

「ひ、ひいああああああああ！」

叫んではいけないのに、条件反射で声を上げる。

逃げなければ。逃げなければ。逃げなければ。逃げなければ。

この城に、この街に、この国に。

“アレ”が通ってきた道中全てに、生存していられた生物はない。

報告を受けた時は、愕然とした。

根絶やし。

討伐に向かわせた者達も、
道を遮る者達も、
たまたま通りがかつた者達も
ことごとく屠られた。

そしてこの地域一帯、生きているのは、
最早、自分だけかも知れない。

孤独、

焦燥、

絶望。

嗚呼。

何故、こんなことになってしまったのか。

ほんの、道楽だったのに。

ほんの、暇潰しだったのに。

ほんの、遊びの、筈……、

ギシリ……。

「…」

次の曲がり角の奥から、軋む音が聴こえた。

不味い。先回りされた。後戻り出来ない。下の階に続く廊下は。此
処しか。ない。

追い詰められた。

逃げられない。

自分も死ぬ。

殺される。

無惨に。

死…、

「…………そりじゅ」

恐怖に囚われた思考に、光明の一筋が射し込む。

思い立つてすぐ、左の障子を開き、畳だけが広がる部屋を進んだ。
一部屋一部屋、襖を開けるのがもどかしい。

早く、早く、“アレ”に追いつかれる前に、辿り着かなければ。
辿り着いて、取り出して、盾にすれば、

“アレ”が自分を殺しに来た原因、それを利用して……、

「何処へ、行く」

声と同じくして、また転けた。

畳みに這いつくばって、遂に追いつかれたと確信し、それでも老獪
は目の前の襖に手を伸ばす。

後少し、その戸の向こうまで行ければ、“アレ”から逃れられ、

「…………？」

立てない。

足の感覚が、無い。

不思議に思い、老獪は振り向いて足を見、

「……………あ」

自分の両足が、もぎ取られていることを、直視した。

「 ッツ ? ! ? ?」

現実と感覚が、思考に追いついた。

絶叫を遙かに超える戦慄きが部屋中を震わせ、彼は不愉快そうに足の残骸を放る。

ゆらりと、彼は近寄った。

逃げるに逃げなくなつた老獪は恐ろしさのあまり、彼にしがみついて懇願した。

「 悪かつた！ そなたには、謝つても謝りきれん。悔やんでも悔やみきれん……頼む、見逃してくれえ、後生じや……。悪氣は無かつたんじやあ……。儂は、ほんに心苦しくて……」

「…………」

情けない姿だと、彼は思った。

年を重ね、一国を治め、人々の頂に立つ者が、これ程に矮小なのか。

こんなにも生に貪欲な奴が、鬼狩りを命じていたのか。

鬼の童が、あんなにも望んで、得られなかつたものを、やすやす

と望むのか。

「そ、そうじや。蔵にある宝物も全てそなたに渡そう。足りなければ、贊も用意するぞ? 人喰い鬼なら、女稚児が好きじゃね?」

それ以上、喋るな。

不快だ。

口を開させ。

楽にしてやる。

道中、難いできた奴等と同じよつに。

自分の行く先を阻んだ、馬鹿共と同じよつに。
何も知らず、のうのうと生きる塵と同じよつに。
救うこと叶わなかつた、アイツと同じよつに。

「お主ら鬼にしてきたことは、一生を掛けて償う。じゃから……」

「…?」

伸ばした手を、止めた。

老獴の言葉に、違和感を覚える。

それでは、自分を鬼と言つてこるようになんて聞こえる。

「俺は、鬼じゃない」

否定した。

自分はあの高貴な存在とは違う。見た目とて人間と変わらないのに、どうすれば鬼と見間違つのか。
だが、老獴は、

「鬼ではない、と?」

一瞬、たつた一瞬だけ皺だらけの顔を、涙と鼻水で汚した表情を真顔にして、

「では、それは、なんじゃ」

震える手を上げて、彼のある一点を指差して、

「その、額から、伸びる、角は、なんじゃ」

皮膚を突き破り、雄々しく反り返った一本の牛角を、凝視した。

「…」

言われて、彼は確かめるように手で額を探る。

触れた硬い角を手に、少し驚いた様子で、しかしそれ以上は何も思わない。

「確かに、俺は鬼になっているな」

冷めきつた眼差しのままに、老獪の首根っこを掴んで持ち上げ、言う。

「けどな。それでも俺は、鬼じゃない。鬼な訳がない」

「鬼…………鬼ひい…………い、」

とても脆そうな、ほんの少し力を加えただけで折れそうな首を、
彼は、

「俺からすれば、お前の方が、余程、鬼だ」

万力込めて、握り潰した。

青年は改めて、額の角を触った。
間違うことなく、生えている。

鬼の証。

鬼と断定づけるもの。

青年は、鬼と、成っていた。

「……、」

特に沸き上がる感情はなかつた。
自分が鬼に成つた。だからどうしたというのか。
関係ない。

これから己れがすることを思えば、
多少、手間が掛かる程度の些事だ。

目的は達成した。

心残りは、ない。

これで、終わる。

そう、『桃太郎』といつ名の他愛のない寸劇は、

この場で、幕を、綴じる 、

「 、 「

襖の奥から、物音がした。

まだ生き残りがいたのか。青年は老獪の骸を跨いで、襖を開ける。この際だ。その唯一の生き残りに、己れの卑しい姿を見て貰おう。きっと、恐れおののくに違いない。

醜悪な姿に、発狂する。

それでいい。

そうすれば、もう自分も足搔いたりはしない。

三度目の正直、今度こそ、物語を終わらせられるだろう。

そう、青年は考えた。

考え抜いた末、襖を開ける。

開けなければ、良いものを。

何時も、何時も、余計なことばかり、する。

それが己れの首を絞めるだけだと、幾度繰り返せば判るのか。

「あ……」

奥の間は、老獪の収集品を保管する間だつた。
壁にも、天井にも、赤黒く変色した鬼の木乃伊が飾られ、部屋の最

奥、主が座るべき場所には、頑丈そうな檻が鎮座していた。
その、檻の中には。

「お前、達は」

「……」

鬼だ。

どれもこれも、一様に額から角を生やした、成人の鬼達。
城の主に玩具にされ、傷こそ塞がつていて、疲弊しきった、鬼達。

十数の眼が、青年を、見つめた。

曇りなき双眸で、青年を、見る。

馬鹿だ。

阿呆だ。

底抜けの、途方のない、前代未聞の、大うつけだ。

どうして、こうなる。

何故、逃れられない。

逃れたいのに、引き寄せる。

嗚呼、神とやう。

底抜けで、途方のない、前代未聞の、糞つたれ。

足らない、のか？

足らぬと、言つんだな？

まだまだ、足搔けと、言つのか？

己のが貴いとした正道を。

最後まで貫けと、言つんだな？

良いであります。

もひ、後戻りは、しない。

する気も、起きない。

いつなつて、しまえば。

最後の最期まで、貫いてやる。

檻の錠は、砕けた。

差し伸べた手に群がる、鬼の囚人。

救いを求め、生を願つた。

彼は、それを振りほどくことなど、しない。

求められたから。

手を取つた。それだけのこと。

手を差し伸べたことを、後悔すると、知りながら。

差し伸べずにはいられない。

己れの性を、貫いてきた志を、下らない正義感を。

呪いながら。

第九篇 鬼焉 キエン

。

「 う

。

「 じ

、

「 かしりー

?

「お頭……。」

「うー。」

耳元にでかい声が飛び込んで、鬼の頭領は眼を覚ました。
瞼む眼を擦つて起きると、洞窟の奥から巨漢の鬼が、頭領の居となる穴に入つてくる。

鬼は頭領の顔をまじまじと見つめて訊ねた。

「どうしたんだ？　こんなに呼んでも起きないなんて」

「いや、少し懐かしい夢を見ていた」

『気にするな、』と頭領は促す。巨漢の鬼もそれに従い、頭領を呼びに来た理由を話した。

「酒を呑みましょーやー。」

「…………」
さな真つ昼間からか

頭領は少し呆れて、すぐに真顔に戻り返事をする。

「判つた。皆も呑むのか？」

「男共は全員ですか。女達が着も用意してますぜ」

「それなら、上に集まつておいてくれ。陽の下で呑むのが良い」

「判りやした」

にかつと笑つて、巨漢は穴から出ていった。酒が呑めるのがそんなに嬉しいのか、とまた呆れる頭領だったが、

「…まあ良いだろう。思つ存分呑み明かすのも、な」

十数年の歳月を掛けて得た安寧だ。浸るのを止めろとは言えなかつた。

あれから 、

随分時間が流れていった。

鬼の頭領がまだ人の青年だつた頃、鬼達は虐げられていた。

鬼を救つたのは、青年だ。

経緯は最早闇の中だが、青年は鬼と成り、鬼達を虐げていた人間達と対立した。

『食人鬼』 人を喰らうことで得た怪力無双を用いて。

その力は、鬼達の希望となつた。

光となつた。

各地に身を潜めていた鬼達は青年に集い、庇護を求めた。

青年は、鬼達を受け入れた。

青年が鬼に変じたその島に集つて鬼狩り衆、討伐衆を払いのけ、十数の年月が経過した。

今や、鬼達を脅かす者はいない。

鬼ヶ島と呼ばれる安寧の地で、繁栄を築いていく。

何者をも、それを奪い去ることは、出来ない。

「……これで、良かったんだよな。桃」

居住区としている鍾乳洞内から地上へ足を運ぶ青年、もとい鬼の頭領は、自問するように呟いた。

地上は光に溢れていた。

笑顔に溢れていた。

幸せに溢れていた。

与えたのは、鬼の頭領だ。

「これで、良いんだ」

皆が頭領を迎える。

杯に並々と酒を注いで。

肴に大盤振る舞いの馳走を用意して。

今、この時の幸福を喜び、分かち合いながら、

「そう。これで、良い」

鬼ヶ島のある位置から程遠く離れた海上。

一隻の小舟が、波に揺られて浮かんでいた。

舟の漕ぎ手は、猿。

向かいに座るのは、犬。

間で寝転がり、惰眠を貪る、主。

奇妙な一行が、小さな小舟で、波に揺られていた。

猿は漕ぎもせず。

犬は時折欠伸して。

主はいびきを搔いている。

奇妙で、珍妙で、不思議と絵になる、そんな一行だった。

「…のう、大狼」

暫くして、猿が犬に話し掛けた。

うつらうつら舟を漕いでいた犬は眠たそうに、話に応じる。

「何だ、闘戦」

「わしら、いつまで『うしていれば良いんかいの

「さあな」

事も無げに言う犬。

また暫く沈黙して、今度は犬の方から口を開く。

「少し、いいか」

「あ？」

「主人は何故、こんな極東の島国の、下位の鬼が引き起^{ハシ}している些事を気にしているんだ？」

犬の言葉で、一匹は共に舟の真ん中で寝る主を見た。
猿は頭をかりかり搔いて、

「やうじやの…。確かに、ちいと寄るだけの筈じやったのに、諸国を荒らす鬼の噂を聞いた途端にそいつらに会つと言^{ハシ}つ出したのは、不思議じやの」

「上位の、神格化される程の鬼なら納得もいくが、その鬼は群れを為して繁殖する下位、餓鬼だ。気にするようなことがあるか？」

疑問に、猿はうーむと唸る。

「柄にもなく鬼退治と洒落込んで……とかじやあ、」

「無いな。絶対に」

犬は断言した。きつぱり断じた。

猿も神妙に頷いて同意する。

辛辣な評価を下されている主だったが、当人は夢の中なので知る由もない。

それはさておき、なら、と犬が話を戻す。

「主人はその餓鬼達の何を気にしている?　お前なら判るんじゃないか」

「なんでもわしじゃい」

「お前は東洋圏の妖魔に詳しいだろ?　お前もその一匹だしな。心当たりの一ツや二ツ、あると考えたが」

「ん~、もうじゅの……」

猿は考える仕草をし、少し間を置いて答える。

「鬼の頭になつたる輩が、人間かも知れんから……じゃ、なかろうかい」

「…人間?　どういふことだ」

犬は詳しい説明を求め、猿は心なしか饒舌になつた。

「食人鬼、つうのを聞いたことはあるかの」

「話だけなら。読んで字の如く、人を喰つた鬼だろ?」

「それじゃ。下位の鬼が人を喰らう」とて、上位にも匹敵する力を得るというもんじゅが…」

「早く言え」

猿は勿体振つた言い方をする。犬は少し苛ついた。

「これはなんでそうなるのか、仕組みは判るかの」

「知らないな。何故だ?」

「下位の鬼は低俗、不完全体であるのに対し、人間は完全体であるからじや。聞いたことあるじやろ。人は神を模倣して創られた、と」

「アダムとイブか?」

「西洋の俗説はよう知らんが、もう一つ。鬼は神が堕ちたとも、人間が堕ちたなれの果て、ともいつ話もある。」

「……だから?」

「完全である存在をその身に“取り込む”ことで、不完な我が身を完全に近づけてしまう…それが食人鬼の正体だという話じや」

完全から足りないものを、

不完全に、足りないものを、

不全、故に完全でない鬼を、万全である人間を喰らい、完全させる。それが『食人鬼』のからくり。

忌避すべき、行い。

「それ自体、墮棄されるべき行為じやから、当然完全体にはなれんのじやがな。キキキ」

何が可笑しいのか笑う猿。

話を聞いた犬は、頭の中を「ちや」させながらも話を理解して、「だから、それが『鬼の頭目が人間』である仮説とどう結びつく」

要点を言わず、焦らされていふことに切れた。

猿はこれが可笑しかつたようで、惱む犬を笑つていたらしかつた。

「キツキツキツキツキツ！ 犬の頭でよう理解したわ。褒めよ、偉い偉い」

「噛み殺すぞ？」

グルルル……と低く唸る犬。

ひとしきり笑つた猿はさらに笑つて、犬の怒りも頂点に、

「お前ら、静かにしてろ」

寝ていた主から不機嫌そうな命令を貰つた。

大も猿も真顔で、共に主を見たが既に寝息を立てて居る。ふつと一息ついた猿は、ふざけた調子を止めて話を再開した。

「あ、何処まで話したかの？……ああ、ああ、食人鬼じやつたな。そんで……」

「それで？」

未だ憮然とする犬に、猿は真剣な眼差しを向ける。

「逆もまた然り、じゃ」

「逆?」

「鬼が人間を喰らうて力を得るなら、人間が鬼を喰らえば、どうなるの?」

「それは」

思案して、犬が答える。

「…完全体が不完全を手に入れても、何も起こらないと思つが」

「そりかの? 濁り無き水に一滴の泥水を垂らして、何にもならんと?」

猿は含み笑いをし、結論を言つ。

「純なる存在に不純物を投じれば、存在もまた不純となろうて。ましてや人間は神の模倣体。何が起きても不思議ではない」

「まさか…」

「各村に出向いて情報を取り寄せた時にあつたじゃろ。一人で鬼が棲まう島に行つたという、無謀な若者の話。それが消息を断つて十日後、圧倒的な力を持つ鬼の頭が現れた。関係ないと、言い切れるかのう」

「…」

犬は黙る。

もしそれが真実なら、その人間は限りなく危険だ。

人間は完全であるが故に脆弱、神の定めた律だ。それが異端なる力を手にしたとなれば。どうなるか。

「…主人は、その危険を排除する為に？」

犬の問いに、猿は、

「な訳なかろ」

「だよな」

二匹一致で即可決。

主の人徳のなさが窺えた。
人ではないけれど。

「話が見えないな。主人はそんなことに手を焼く性格ではないだろ
う」

「全くじや。単に興味があるからとか、そのくらいの理由かも知れ
んし、この旅に關係のあることかも知れんし。どのみち主が喋らん
けりや、わしらには謀り知れんわな」

「だな」

取り敢えず主は酷い奴だから討伐は有り得ない、という見解を下し
たところで一匹は黙つた。

「…」
「…」

一匹は青空を見上げる。

「…」
「…」

流れる雲を見つめる。

「…」
「…」

雲の位置が大分移り変わった頃、一匹は口を開いた。

「…暇じやな」
「…暇だな」

どうやら、先程の弁論はただの暇潰しだつたらしい。話の種がなく
なつたので、また振り出しに戻ってしまった。

他に話せることはないか、それとも主のように寝入つてしまおうか、
と犬猿が頭を悩ませていると、

「…其処のだらけきつた畜生共は何をしているんですの？」

「ん、鳳か」

「やつと来あつたかい。島は見つかつたかの？」

南の空から一匹の鳥が、小舟まで羽ばたいて降り立つた。犬猿はや

つと現れた仲間に労いを『える』ことなく、島が何処にあるのかを聞く。

鳥は大いに機嫌を悪くしながらも、四の問い合わせに応じて、

「（）苦勞様、頑張ったね、ぐらい言つて欲しいんですね。貴殿方にそれを求めるのは酷なんでしょうけれど……それはそれとして、島なら、此処からお日様のある方角へ真っ直ぐ行けば着きますの。でも……」

「でも、なんだ？」

途中言い淀んで、それから島の状況を包み隠さず教えた。

「鬼達は全員亡くなつてました。たつた一人を残して」

島に来訪者が現れた。

犬と、猿と、鳥を連れた、漆黒の見たことの無い衣服を纏つた長身の男。

小さな小舟に揺られながら、岸に辿り着いて上陸すると、岩に腰掛けっていた俺に向かつて歩いてきた。

俺は血に塗れた身体を立ち上がらせ、二匹と一緒に相対して次の言葉を投げ掛けた。

「此処へ何をしに来た」

長身の男は俺を見て、逆に質問を返す。

「お前、人間だな？」

「…」

「鬼に成り下がつた、哀れなヒト。もつヒトですら無くなつた、可哀想なモノ」

「……此処へ、何をしに来た」

俺は繰り返す。

目の前にいる男がただの人ではないと感覚が告げている。後ろに連れ添う三匹も、ただの獣ではないと判る。鬼と似た存在か、それを上回る存在か、

どちらでも良い、とすぐに考え直す。

こいつらが何をしに来たところで、もづ、事は終わったのだから。

「後ろ」

男は俺の問い掛けなど気にもしないで、島の内陸を指差した。薄ら笑いを浮かべながら、男が聞いてくる。

「お前が、殺したんだな？」

「…嗚呼」

嘘を吐く必要もないのに、頷いた。
俺の後ろにまは。

この島にいる俺以外の鬼達の骸が、横たわっている。

「どうして、殺した」

依然として男は薄ら笑いのまま、不躾に問い合わせてくる。人を苛立たせる顔だ。見ていいだけ気分が荒んでくる。不愉快だ。
が、俺は男の問答に応える。浅ましいのは重々承知しているが、やはり黙つていることは出来そうになかった。

どんなに月日が経つても、

俺は、弱いまだ。

「どうして殺した、か。……贖罪だ。いや、けじめだな。鬼を傲らせ、墮落させたことへの」

独白する。

俺の犯した罪の全てを。

俺が貫き通した正道の、結果と末路を。

「ほんの少し、手を差し伸べるだけだった。鬼達をまとめあげて、

人間から身を守れるだけの力をつけるだけにする筈だった

「けど、事は上手く運べなかつた。俺が現れたことで、各国の領主は総出して鬼を狩り始めた。次は自分かも知れないと危機感を覚えたらどうう。俺はやむを得ず戦の矢面に立つて力を奮い、迫る刃を払つて退けた」

「人間の脅威が収まると、今度は鬼達が活気づいた。今までやられてきた仕返しにと村々を襲い、女童関係なく殺し、奪えるもの皆奪つていつた」

「俺は元々部外者だ。その場で諫めようと鬼達が止まることはない。飾りの頭になるのには、そう掛からなかつた。とはいっても、俺がいなければ鬼達の状況は最悪のまま、虐げられる日々のままだつたから、皆は俺に対する敬意だけは忘れなかつたが」

「それでも鬼達は日増しに傲慢になつていつた。恐るべき人間は最早どうということはない。自分達の方が強い。だから、もっと奪え。奪わってきた分を奪つて、奪つて、奪い尽くしてしまえ。その為に、更なる強さを手にしろ、と」

「限界だった。鬼達はその禁忌だけは侵すまいとしてきたのに、鬼の誇りすら忘れ果ててしまった。いや、俺が忘れさせてしまった」

「言葉では止められない。俺の噂を聞いて集まつた鬼の数を入れて数百、皆が皆、人を喰おう、喰い殺そうと声を合わせた。手にした力でさらに入間から奪おうと」

「結果、俺は鬼達を全員殺すこととした」

「俺が手を差し伸べさえしなければ、鬼達の心が歪むことは無かつた。穢れた行為を何の躊躇いも持たずに行つよつこなにならなかつた」

「俺が招いた災厄だ。だから、俺は自分の手で幕を引かなければならなかつた。元凶である俺が討たなければ、俺自身の正道に反するから」

「それが、鬼を皆殺しにした理由」

「それで、全て終いだ」

ぱちぱちぱちぱち、と。

話し終えた俺に、男は手を叩いた。

もう顔に薄ら笑いはない。ただ真横に細く伸ばされた眼で俺を眺めて、

軽い調子で、訊ねる。

「御大層な演説をピース。つこどじもつーつ良いか?」

「何だ」

「お前は、これからどうする」

「……」

押し黙つた。

答えられない俺に、男は詰め寄る。

腰を屈めて、背を低くして、男は上田遣いに俺を見下す。また、口元を斜め上に吊り上げて、

「鬼を救おうとして、結果墮落させ、自分本位に殺戮した。その後は？　“お前自身の罪は、どう裁く？”」

「…………やつだな」

見上げながら見下され、俺はふつと可笑しくなって笑った。恐らく、十数年間一度たりとて想わなかつた、『笑う』という感情を、抱いて、表に晒け出した。
己れの罪をどう裁ぐかなんて。
考え直す、ことすらしない。

「もう一度聞く。此処へ何をしてきた」

俺は再び、その言葉を口にした。

男がこの島に来た理由。

どうでもいいように思えて、今の俺にはとても重要なこと。
俺が期待するような返答をするだらうか。してくれれば良いが。
だが、神はそれを許さない。
未来永劫、赦さない。

「此処へ来た理由か」

男は背を元に伸ばして、俺を見下ろして見下した。

愉快そうに、不愉快に、

機嫌良さげに、不機嫌そうに、
怒っているのか、泣いているのか、笑っているのか、楽しんでいるのか、どつかずの表情で、

「理由は色々あるが、それが最も適切だと~~言ふ~~そ~~う~~な理由を教えてやるよ」

またしても、薄ら笑いを顔に貼りつけながら、言った。

「自分で手を下せない、なんとも情けない臆病者の間抜けな姿を、拝み倒しに来たんだ」

その後は、

男は高笑いしながら小舟に戻つていった。
連れの三匹も男に従つて舟へ、乗り込むと岸を離れて島を出ていく。
あれらがこの島に来てしたことといえば、俺の話を聞いただけ。他には何もせず、ただ馬鹿みたいに笑つて、帰つていつてしまつた。
俺が期待した展開には、ならなかつた。
都合、良すぎたか。

この頃合いに誰かが島に来るなんて、運命としか言い様がないと思つたけれど。

そうそう思ふ通りには、いかない。

俺がこの島に初めて來た時も、

桃が鬼狩り衆に襲われ、俺が重傷を負つた時も、

俺が島を出て引き返し、桃を救おうとした時も、

俺が鬼と成り、桃の仇を取つた時も、

鬼達を殺し尽くした、今この刻すらも。

上手くいかない。いつくれない。

当然だ。誰かにそれをして貰おうなんて腑抜けた考え、上手くいく訳がない。

やはり、自分自身の手でやらなければ、いけない。

幾度も、幾度も、幾度も。

こんなに墮ちた状況にならないと決心出来ない己れを、とことん呪いたくなる。

でも、もういい。

もう、疲れた。

これで、良かつたんだ。

これで。

よつやく、俺は。

おれは。

また波に揺られて来た海を戻る一行。その内、来た時と同じく櫓を持つて舟を漕ぐ猿が主に聞いた。

「まさかとは思つが、ほんにあんな下らん理由で此処まで来たとか抜かさんよな」

「抜かすけど」

「……」

主の即答で猿は黙つた。

次いで、舟の縁に留まる鳥が鬼の行く末を案じる。

「彼つてこの後どうするんですね？　たつた独りぼっちで生きていくのつて辛そうですねのみ」

「生きないぞ、アレは」

鳥の発言にまた主が答えた。

楽しそうに、今度こそ愉しそうに笑つて、答えた。

「あいつは自分で命を絶つ。十数年前にあの島に向かつた本当の目的を、ようやく果たすんだ。ははっははは」

「……」

「……ハア」

「流石は御主人様、よく判りますの」

犬猿はうんざりして、鳥だけは感心して、主は高らかに笑う。

一行の乗る小舟は大海を進み、何処かへと消えた。

後に残された島は、無人の島となつた。

鬼ヶ島と呼ばれた孤島は、後数百年経てば海の底に沈む。島があつたという事実は、古い古い御噺の中だけに語られるようになる。

世を脅かしていた悪鬼は人知れず消え去つて、

鬼の存在もまた不明確になり、

人々の記憶から、鬼が忘れ去られて久しくなつた頃、

こんな御噺が、世に出回つた。

昔々、あるところにて、

桃太郎という若者が、おりました。

桃太郎は正義感が強く、

とある島に棲む凶暴な鬼達が、人々に悪さを働いていることを人伝に聞き、

鬼に対して大層な怒りを覚えました。

桃太郎は自分を育ててくれたおじいさんとおばあさんに別れを告げ、

鬼を懲らしめるべく、鬼ヶ島と呼ばれる絶海の孤島へと旅立ちます。

道中に出逢った犬と、猿と、雉を家来において、

幾多の困難を乗り越え、

鬼ヶ島に辿り着いた桃太郎は、

鬼と対峙し、

戦いを挑みました。

桃太郎と鬼達との戦いは熾烈を極めましたが、桃太郎はついに最後の一匹まで鬼を屈服させ、

その強さに恐れをなした鬼達は改心し、以後一度と悪さを働くかない
と誓いました。

世には平穏がもたらされ、

人々は桃太郎に感謝し、

皆、何時までも、何時までも、平和に暮らしましたとや。

めでたし、めでたし

⋮。

後が鬼（後書き）

どうせー。

此処まで読んで下さり、ありがとうございました。

桃喰鬼、完！ とこいつことだ。

後書きです。

えー、この小説を通して作者である私は一体全体何を西様でお伝えしたかったのかといふと……、

言いたいことがあるなら、ハッキリ言葉で言いやがれ。

なよつてんじやねえよ。一度決めたら最後まで貫けやーのはヤロー。

です。

口汚くてすいません。

もう、ね。最近の若者は言葉が足りない！ お互に言いたいこと言わないからすれ違つて痛い思いするんだよ悲劇が起つやうなんだよ。話しあえば戦争だって起こりやしないよ？ 理想論だけだ。

まあ、そこいら辺は島流しでもしておこう。

いじから平謝りターミン。

先ずは執筆の停滞。

遅いよ。

書き初めから何ヵ月経つたと思つてんだぞいつくぞこら。 どつかないで。

次に長い。

当初は全肆篇で構成するつもりだったのになんだこれ？ 第肆篇
鬼憶 キオク の方でかなりお話削つたのにこの様だよ計画性無さ
すぎだよ死ねば良いのに。 すいませんまだ死ねません。

最後に主御一行様。

…桃太郎の世界観から関係無くなってるね。 いやさ、食人鬼の仕組みを解説する役が欲しくて出したんだけどどうなんでしょう。 闘戦とか別伝記の主人公だし大狼はどうこそその神話の化物だし鳳は言わずもがなでの鳥だし主謎過ぎだしじーこーけーんーおー…。

私的にはこいつら出したことに大満足だから反論の一切は感想の方で受け付ける…！

反省は、 しますよ。

さあて書き終わつてみるとさつぱり桃太郎らしくない小説になつてしましましたが、 実は後もう壹篇だけ書く予定です。
桃が救われてないしやつぱり桃太郎なんだから真にめでたしめでた

しな終わりにしたいとゆ一またしても作者の自己満足の為の行動な訳で、それで読者様が納得するかは判りませんが、一応書いてみます。

やつぱりハッピーハンドが一番だよ。うん。

それでは、最後にして最期の第拾篇 鬼完 キカン を執筆しますので、もうしばらくお付き合ひ下さいませ。

あー後ね、各話の題名の元字といつか語呺合せにした二字熟語一覧を載せとります。書いてる途中で話の予定内容を変更したりしたので、意味が若干各話と違つてるものがありますが、ご愛敬を持つて下さると作者は救われます。どうか救つてやつて下さい。

第壹篇 鬼逢 気合

第弐篇 鬼怪 奇怪

第参篇 鬼決 既決

第肆篇 鬼憶 記憶

第五篇 鬼朱 奇襲

第陸篇 鬼生…氣丈

第漆篇 鬼哭（これだけそのまま使用）

第捌篇 鬼赦・喜捨

第仇篇 鬼焉…奇縁

第拾篇 鬼完…祈願

第拾篇 鬼完 キカン

『人々は桃太郎に感謝し、』

『…』

『皆、何時までも、何時までも、平和に暮らしましたとさ』

『…』

『めでたし、めでたし …』

『…』

「 駄作」

「ぐ」

徹夜で書き上げた嘶を読み終えた少女の感想は、それはそれは厳しい一言だった。

部屋の真ん中に座り固唾を呑んでいた太郎は、原稿用紙の束を取り落とし、意氣消沈して頃垂れる。

少女は落ち込む太郎を余所に、落ちた内の一枚を取り上げて淡々と悪い点を連ね上げていった。

「先ず主人公がヘタレ。……ん、これは太郎がヘタレだから仕方無いか。それと桃に服を着せる。官能で非難されても良いなら自己の判断に任せること。台詞だけの部分が過多、手抜きは読み手に嫌がられる。主と下僕三匹は基本要らない。そもそも文章の構成 자체が稚拙、幼稚、児戯にも等しい。文才が無いのに無理に書いても」

「ああ、ああ、判つた。判つたからもう許してくれ。気が持たん」

「しつかり静聴する。反省なくして成長は見込めない」

「今更育つてもな……」

太郎は脱力した身体に鞭を打ち、紙を拾つて机に向かう。書き上げた原稿は丸めて籠に捨て、新たに取り出した紙を机に、筆を取つて字を書き込んでいく。

度々筆の毛先に墨汁をつけ足して序文辺りを書き、終えると次の章へ移る。その間、暇を持て余した少女は退屈しのぎに太郎の背中へ身を預け、後ろより執筆風景を覗き見ながら太郎に話し掛けた。

「ねえ、太郎。『桃太郎』の嘶は前にも書いたのに、何故また書き

直すの？ それも太郎が“鬼に成ついたら”という喩え嘶

「何故つて、思いついたから書いてるだけだ」

「…。根暗な結末、太郎にお似合い」

「やかまし」

「ふふ」

氣を散らかして苛つく太郎を、少女はくすりと笑つた。顔を肩と首筋に乗せて、幸せそうに眼を閉じる。

少女の長い髪が、開け放たれた窓から陽が差し込み、照らされて輝く赤髪が太郎の身体にまとわりつく。

背中に柔らかいものを、髪が肌をくすぐるのを感じて太郎は少女に言つた。

「……桃。邪魔だから、退きなさい」

「胸を押しつけて邪魔がられたら、女冥利に尽きない」

「尽きんでいいから」

「嫌ー」

「…全く」

女人としての恥じらいを持て、という意味合いを含めて言つたのだが、少女は委細気にせず太郎に寄り掛かる。呆れ、更に注意しても詮ないことかと諦めた太郎は、大人の身体に変わりつつある少女を

思つて感慨に耽つた。

桃は大きくなつた。あれから一百年近く、世も移り変わり始めて鬼の存在は世間から忘れ去られた。

昨今では各国が領土争いをし始めているが、鬼である桃に飛び火することはないだろう。

俺ももう歳だ。何時までも桃といられはしない。身体の衰えは日毎に足を速くしている。残された時間は残り僅かだ。

別れの時は近い　　その時が来るまで、してやれる」とはしてやらなければ。こいつが後の世で生きられるように、俺は惜しみなく己が身を犠牲にしよう。桃をより幸せにしてやひひ。

それが、俺が遠い昔に捨ててきた正道の、最後の貫きになる。

「　　太郎」

「ん？」

どれだけの時間、二人はを寄り添つていただろうか。少女は身体を離して太郎に言った。

「陽が高くなつた。そろそろ出発しないと」

「おつと、もつさんな頃合いか。荷物を片付けて宿を出るが

「了解」

太郎の言葉で少女は立ち上がり、宿場の浴衣をその場で脱ぐ。だから恥じらいを持ってと言うに、と太郎は思つたが、一々気にすると切りがないので、此方も書の道具類を片付け、旅支度を済ませた。

旅籠を出ると、夏の匂いを含んだ風が辺りに吹いた。

近くの山林からは蝉の鳴き声、空は蒼々く、昇る太陽は容赦なく大地を照りつけた。夏真っ盛りである。

風に髪をなびかせ、海沿いの街道を往きながら、少女ははしゃいで喋る。

「太郎、太郎、西瓜が食べたいと思わない？」

「嗚呼、今年はそいえば食べてないな」

「なら、帰路の旅籠で買つて食べよう。氷も買つてね」

「はいはい」

元気には走り回る少女を後から、旅荷物を担いだ太郎が続いた。

街道には他に旅人はいない。太郎と少女の二人だけが、陸の端まで伸びる道を歩いていく。

不意に少女が振り替えつて太郎を見た。

嬉しそうに、幸せそうに、老いた姿の太郎に手を振つた。

無邪気な少女を前に、太郎も苦笑して足を速め、少女を追う。

本日は、あの島で太郎と桃が初めて出逢った、始まりの日だ。

「早く行こう、太郎。“お母さん”が待ちくたびれるよ

太郎と桃が恋に落ち、一人の子を、授かった日。

「嗚呼　　、彼奴も、お前が来るのを楽しみに待ってるよ。
桃華”」

太郎の最愛の妻となつた桃の、

命日となる、日だった。

「今度こそ、貴方を、殺害する」

あの日、

「私は桃じやない。名はもう無いと、告げた」

あの時、

「いい加減、茶番劇は終幕にしよう、『桃太郎』」

桃は、太郎を殺そうとした。

“自分自身を、殺して貰う為に”。

太郎の申し出は、とても嬉しかった。けれど、それを受け取ること

など、桃には出来なかつた。

桃は、『仲間』を失うことを、何より恐れていたから。

己を救いに来た太郎の姿は、戦い、傷つく青年の姿は、何処までもかつての死した仲間と重なつたから それが、桃の他殺志願を強くしてしまつた。

それだけではない。

太郎は圧倒的な数の劣勢を覆して敵を追い払つた。

まるで人を喰らつた鬼のように。鬼と変わらぬ力を手にしたように。其処で、桃は己の過失に気づかされた。

それは瀕死の重傷を負つた太郎を救う為、自らの血を飲ませたということ。不老不死の噂にある程度の信憑性を託し、賭けに出たこと。結果、噂は真実だつたことを示した。違つたのは、不老不死にするのではなく、鬼と同様にしてしまつたことだ。

太郎はあの時、鬼と成つていた。

つまりそれは、桃と太郎に、直接的な繋がりを持たせてしまつたことになる。人と鬼との唯一の境界線を、自分で取り除いてしまつたのだ。

太郎を仲間のように思い始めていた桃にとつてそれは、何よりも耐え難い事態だつた。

それが、桃にとつての最後の後押しとなつた。

そんな下らない理由 下らない事実で、彼女は死を選んだのだ。

一芝居打つて太郎を襲い、恐怖感を煽つて、

危機に直面すれば、彼はきっと私を殺す。殺してくれるだろつと願い、捨てられた刀のある方へ追い詰め、願つた通り、太郎は刀を掴んだ。

始めに桃と対峙した、時のように。

その刃を持って、桃の首を、撫で斬り、

「駄目ですよ
ツ！－！」

邪魔が入った。

空から羽ばたいてきた一羽の鳥が、太郎に対して勢い良く突っ込んで。

太郎は刀を弾かれ、桃は闖入者である鳥が喋りながら突撃したこと

に仰天して。

遅れてやつて来た黒服の男と、鳥と同じく喋る犬と猿が現れて場の緊迫感は綺麗に取り扱われて。

偶然にしては出来すぎる登場をしたその一行から、鬼の真実と、桃と太郎の身に起きた事象の全てを、教えられた。

一日後のこと。

太郎は島を出て、本土へと帰つて來た。海岸から程近い旅籠の店先に立ち、店主から茶の申し出を断つて山々を見つめる。

黒服の男が残した言葉を、幾度も頭の中で繰り返し、考える。

「 ははっは、こりゃ面白い。人と鬼の存在が“入れ換わる”なんてな」

太郎は其処で自分が鬼に成つたことを知つたのだが、それより驚いたのは、桃の状態だった。

桃は、鬼では無くなつていた。

原因は良く判らない。黒服の男でさえ、何故そんなことになつたのか理解出来ないでいた。ただ、あの男が言うには、

「人間が鬼の血肉を得るつていうのは余り前例がないし、通常外の事象が起きても不思議じやあ、ない。良く良く見た感じ、お互い、成り切れたようでもないしな」

太郎は鬼と人との中間止まりで、鬼の血を刺激する……人を喰らうとか、そういうことをしなければ、多少の身体能力と生命力の上昇、老化が遅延するだけで、人間と余り変わらないらしい。額から角が伸びる、というようなことも無かつた。

桃は……鬼では無くなり、その上、人ですら無かつた。身体の再生能力は残つていたし、力も常人よりは僅かに高いままだつたが、全体を通して言えば、桃は食人鬼の力は勿論、鬼の力も失い、人としても、劣る存在と為つていた。

それが何を意味するのか、太郎も桃も判らなかつたが、一つ、桃の世界觀を変えてしまつ程の、大きな結果をもたらした。

桃は、仲間を失うのが怖くて、一人が嫌で、死にたがつていた。

仲間である鬼を、失いたくなかった。

だが、桃はもう、鬼ではない。

人でもない、ナニかだ。

ならば。

一人である問題を除きさえすれば、死のうなんて思ひは、無くなる。

「おお、遅か…」

店内の奥から桃が出てきた。島を出でた際、上半身裸はかなり問題があると太郎が提案して、急ぎ用意した無地の着物を着てている。男か女か見分けのつかない桃だが、女性用の着物を着れば、それなりに、

「何?」

「…………いや、特に、何も」

俺に童女を愛でる趣味はない、と言い聞かせ、太郎は眼を逸らした。拳動の怪しい太郎を訝しく思う桃だが、気にせず店先に出て、着心地悪そうに着物の袖を持ち上げた。

「無かつたものを急に羽織ると違和感が拭えない。ざりざりの感触が気持ち悪い」

「そりじへりこ巻けよ」

「誰が、胸の話を」

「…………

墓穴を掘つた。

「ごほん、とわざとりしく咳をして、荷を肩に担いだ太郎が西の山へ続く道を歩き出す。桃も太郎に倣い、隣を歩く。旅籠から離れた一本木まで来たといひで、桃が口を開いた。

「太郎はこれからどうする。他の鬼を捜して、私のように助ける?」

太郎は考えず、いや、と答えた。

「俺は完全に鬼に成った訳じゃないし、積極的に助けに行くのもな。
余計なこととして、余計な結末を迎えるのは、もう嫌だ」

「それは」

「俺が鬼ヶ島に向かつた理由。お前に逢つた訳だよ」

「…」

「お前は、どうある?」

逆に、太郎が桃に聞き返した。

前を見れば、道は一手に別れ、一方は山へ、もう一方は海岸沿いの道に伸びている。

二人は二股で止まり、互いに見つめあつた。

「俺は適当に旅でもしようと思っていた。故郷には嫌な思い出があるから帰る気はない。気に入った土地があれば其処に居を構えてひつそり住むし、無ければ根無し草だ。國中を旅するのも悪くない」

「そう」

「お前は?」

再び太郎が聞くと、桃は俯きながら、言つ。

「……は、……」

「ん？」

聞き取れず、太郎はもう一度言つてくれと促して、桃は顔を上げて、言つた。

「もう、一人は、嫌だ。だから、その、太郎と

「俺と」

顔が赤くなる。

「太郎、と、一緒……に」

「一緒に」

太郎は面白がつて反復する。

「…………」

「一緒に、なんだ？」

黙る桃に調子づいてからかい、

「…………」

「一緒に何なんだ？　言つてくれないと判らないぞ？」

「…………ツ

答えはもう判つているのにわざと聞き返して、がすつと。

「なあッ！？」

「五月蠅い。四の五の言わずに、ついてくる」

強烈な脛蹴りを貰つて、桃は踞る太郎を無視してさつさと海岸沿いの道を歩いてしまつた。

太郎は痛みに悶え、桃の正直でない態度を可笑しく思いながら直ぐに同じ道を辿る。

追いついた太郎は桃に文句を言つて、桃は口を尖らせて先を行つた。

これにて、桃と太郎の物語はお終い。

「さて、先ずは北か。蝦夷は寒いだろつな。何処かで厚着するものを調達しないと」

「寒さに下る鬼じゃない」

「もう鬼じゃないだろ。お前も、俺も」

「……口答え、するな」

「ぐあ！……おい。その手を出すの、やめてくれないか」

「うふふ。少し、快感」

「……」

この後、桃は著しい成長を遂げ、二年で大人の女性となり、太郎と恋に落ちる。

二年後には子をもうけ、桃華と名付けて大切に育て、

四年後、老化は増えず、瞬く間に歳を取り、

そり一一年の後、桃は他界することになる。

「なあ、桃。今回の顛末を字にしてみよ」と囁つんだが

「書を？ つつけが？ どうして？」

「つつけは関係ないし、書と語つほどのは書かない。そつだな、物語をかいつまんで、童達に聞かせるような簡単な御伽噺だ」

「御伽噺。良いんじやない、貴方に書けるかは保証しかねるけれど」

「言つたな……よし、これから先ずっと語り継がれるような噺を書いてやる。覚えていろ」

「期待はしない。…………あ、太郎」

「何だ、急に慌てて」

「噺を書く際に、事実と変えて欲しいところがある」

「変えて欲しいこと」「うる？」

「……私は、上着を着ていたこと」「して欲しい

「……」

「な、何故、黙るの」

「いや……気に、してたのか……裸だったの……」

「う

「…………ふふ！ ふははははははは…… わっはははははははッ」

「わ、笑うな。笑うな！」

「ぶはははははは！ ……く、何時も澄ました顔で、堂々と晒して無い胸張つていたのに……くツ…」

「……ツツツ」

「あ、待て、嘘だ、冗談だ、冗談だから、おい、ちょ…」

人より、鬼より劣る存在となつたから、異端の存在となつてしまつたから、成長が狂つたのかは、誰にも判ずることは出来ない。

偶然島を訪れ、桃と太郎を救い、また何処かに消え去つた一人と三匹にも、判らないだろう。元より、物語の部外者である彼等が気にするとも思えないが。

しかし、だ。

皺にまみれ、床に臥せた桃も、赤子を抱いて、桃看病する太郎も、この厳しい現実を悲観したりはしなかつた。

決して、絶望したりは、しなかつた。

「すまなかつた。俺が悪かつた。許して下さい。お願ひします」

「……」

「（無言で睨むな。怖い。怖いし、恐い）」

「太郎」

「はい」

「私は、生きたい」

「は……え？」

「私は、もう少しだけ、この世を、生きていたい。駄目、かな？」

「……」

桃は生きる」とを望んで、

望んでからの十年を、幸せに生きたのだから。

「…良いだろ、生きて。俺もな、」

「俺も？」

死ぬ為に一人で鬼ヶ島に向かつた太郎も、

生きて、桃と一緒にいたいと望んだから。

「俺も、もう少しだけ生きてみたい」

「太郎」

「駄目か？」

かつて太郎は、桃が笑つたことを怪訝に思つたことがあつた。
死を望み、なのに笑うことを探した桃を、理解することが出来なかつた。

同様に死を望む自分は、笑えなかつたから。
どうして笑おうという気持ちになれるのか、理解に苦しんだ。

でも、今なら、判る。

「…駄目」

「おい」

「生きたければ勝手に生きれば? 私も勝手に生きる」

「なんだそれは。つたく…」

「ふふふ」

「はあ。…はは。ははは」

笑いたいから、笑うのではなく。

楽しいから、笑うのだ。

だから、楽しめ。

「さあ、行こう。太郎

「嗚呼、行こうか。桃

独りで無理なら、一人で。

思いを伝え合い、想い通わせて。

今、この刻を、生きる。

その為に、意地の悪い神とやらは、助け舟を出したのだから。

第拾篇 鬼完 キカン（後書き）

「おまけ」

「太郎、何してるの？」

「ん、前に言つてた嘶を書いてる。でも、上手くいってない」

「ふーん……童に読み聞かせるのだから、もっと簡略化すれば良い。それと、事実をそのまま書いても面白くない」

「かん……ええっと、それは良いとして、事実を書かなきゃ意味が無くないか？」

「童が喜ぶ嘶は、鬼は本当は悪くなくて、意地汚い人間の方でした」とさ……そんな訳ない。格好の良い主人公が悪さをする鬼を倒す。これが一番。お供にあの犬、猿、鳥を加えるのも良い」

「それはそうだろうけど。元鬼のお前としてその嘶を書くように言うのはどうなんだ？ それに、その嘶だと桃を悪役にしないといけない。良いのか？」

「…では、少し悪ふつてみる。てりやー」

「つむぎよつと待て何を…………～～～～～～～～ツツ…」

「私、悪い鬼？」

「…嗚呼、お前は鬼だ。物語はそれでいい。ただし、極悪な鬼ならやつぱり筋骨隆々でないとな」

「え」

「胸毛もふさふさで体臭きつぐ、やられる時は犬に噛まれて猿に引つ搔かれて鳥に眼を潰されるといいな。よし、書こう」

「待つた。それ、既に私でない」

「大丈夫。名前を桃に」

「てりやー（怒）」

「だからお前其処は

ツツツ」

てな感じで、原典『桃太郎』が出来たとち
めでたし、めでたし。

登場人物表

太郎（桃太郎）

：正義感の強い青年。その正義感ゆえにあらゆる問題に首を突っ込んで状況を悪化、ある時最悪の結果を招いて責められ、それを苦に自殺しようとして、自殺だと様にならないから鬼に殺して貰おうと鬼ヶ島に訪れた。基本ヘタレ。鬼の童と出逢い、島を出た後、原典『桃太郎』を執筆、放浪のついでに世に広める。

桃（鬼）

：鬼ヶ島に棲む最後の鬼。母の遺志を継いで生きていたが、日々鬼狩り衆に襲われたことで疲れ果て、太郎に殺すようにならぬ。瀕死の太郎に血を分け与え、太郎を鬼に近い存在にした。その際、桃は鬼では無くなる。理由は不明。太郎と共に島を出た後は、十年しか生きられなかつた。

食人鬼

：妖魔の中で下位に位置する鬼が人を喰らうことで起ころる現象。喰らつた鬼は上位に匹敵する力を得る。逆に人が鬼を喰らうと人を鬼、それ以上の何かに変じるが、例がほとんどないので詳細不明。

主

：桃と太郎が殺し合つ寸前で現れた謎の男。妖魔、その他あらゆる

ことについて詳しい。何らかの目的を持つて島に訪れたようだが、詳細は不明。性格悪し。太郎が書いた原典『桃太郎』で実際にモチーフにされた存在。名前が不明だったので桃太郎の名がついた。

大狼

：犬。主に従う三匹の一匹。太郎が書いた原典『桃太郎』で実際にモチーフにされた存在。

鬪戦

：猿。主に従う三匹の一匹。太郎が書いた原典『桃太郎』で実際にモチーフにされた存在。

鳳

：鳥。主に従う三匹の一匹。太郎が書いた原典『桃太郎』で実際にモチーフにされた存在。そちらの方では雉と表記。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5635d/>

桃喰鬼 トウクウキ

2010年10月16日19時22分発行